

## ゴシック古典様式カテドラルの成立とその背景： Chartres, Reims, Amiens を中心として（下の二・ 完）

森, 洋

<https://doi.org/10.15017/2244514>

---

出版情報：史淵. 95, pp. 55-95, 1966-02-15. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# ゴティック古典様式カテドラルの成立とその背景

——Chartres, Reims, Amiens を中心として——（下の二・完）

森

洋

## 五、カペー家諸王と大司教・司教

大司教、司教は、何れも選挙を通じてその職につく。その選挙及び叙任は、十一世紀以来の闘争と論議をへて、少なくともカペー家との関係においては、十二世紀後半に、次の如き手続によつて行なわれるにいたつた。

- i 教会は、空位が公けになるや、王に「選挙許可」(licentia eligendi) を求める。
- ii 「選挙許可」が与えられたならば、選挙団が召集される。
- iii 選挙団は、被選挙者を指定する。
- iv 首座大司教が、選挙の *canonicité* を証明する。
- v 王が被選挙者に同意又は確認 (*assensus, confirmatio*) を与える。
- vi 被選挙者は王に「忠誠誓約」(*fideltas, serment de fidélité*) を捧げる。
- vii 王から《*regalia*》が返還される。
- viii 「首座大司教によつて」聖別 (*consecration*) が行なわれる。<sup>(1)</sup>

ゴティック古典様式カテドラルの成立とその背景(森)

以上のうち、本章で考慮する必要があるのは、王との交渉が、i・v・vi・viiの四項、即ち licentia eligendi の賦与と、被選挙者の confirmatio、同人の王に対する fidelitas に続き、同人への regalia の返還と云う手続きにおいて保たれていることである。<sup>(2)</sup> これらの processus は——見極めて消極的ではあるが——言及することを免けた droit de dépouilles をも含めて、理論的には相互に密接につながりあっている。即ち王は当該司教座の創設者とみなされ (fondateur présumé)、この故に王は、当該司教座をその保護 (protectio) の下におく。従つて司教座空位中 (sede vacante)、それは当然王の手に (in manu regis) 帰ると云う理論がそれである。<sup>(3)</sup> この理論自体の当否は別として、こうした観点から、司教は本来俗権に関しては、王の権利 (regalia = jus regale, jus regaliarium, jus regaliorum) を行使しているのであつて、司教座空位期間、regalia は当然王に返り、しかも新司教叙任と同時に regalia は司教の手に戻るといふ觀念、<sup>(4)</sup> 更に司教座又は修道院長空位中に、王その他の手に移る司教座教会又は修道院財産の用益権のみを、droit de régale として区別する觀念が展開され、後者の典型は、一一九〇年に Reims 大司教 Guillaume の要請による王の chartre に明示されている。<sup>(5)</sup>

カペー諸王は Hugues Capet 以来実質的に droit de régale を行使して来たが、<sup>(6)</sup> 《regalia》と云う語そのものを用いて、その行使の過程を明らかにした例を、我々は Suger の書簡中に見出し得る。一一四九年に Chartres の司教 Geoffroy (1116—1149) が死んだ際に、当時十字軍出征中の Louis VII の撰政であつた Suger が、「王に代つて regalia を受取り、且保ツタメニ」(ex parte domini regis ad recipienda et conservanda regalia) 使を差して Chartres の Capitulum 宛に書をざくした。<sup>(7)</sup> この回 Capitulum が、王の許可 (regia licentia) にあつて Gauzin (1149—1155) を司教に選挙した旨の通知にそえて、regalia の返還を求めて来たのに対し、<sup>(8)</sup> 彼はその選挙を確認すると同時に、次の如き返事を書いた。

「……regalia ニツイテハ、フランス王ノ宮廷ニテ旧キ慣習 (mos antiquus) [トシテ] 遵守サレテイルコト衆知ノ如

ク、episcopus が聖別サレルヤ、教会ノ慣習 (mos canonicus) ニヨリ宮殿 (palatium) ニ導キ入レラレルベク、シカル後ニ、彼ニスベテ (ノ regalia) ガ返還サルベシ。シカシテ上記ノ如ク (episcopus ガ) 宮殿ニテ定メノゴトク王ト王国トニ忠誠 (誓約) (fidelitas) ヲナシ、シカシテ直チニ regalia ヲ受ケトルコト、コレコン返還ノ秩序デアリ慣習法デアル。」<sup>(9)</sup>

この三書簡は、十二世紀の半ばには、上記王側の司教選挙手続が、ほとんど自動的に行なわれ得る程に、すでに定式化していたことを示している。更にこれらの書簡は、licentia eligendi を得るためには、教会側は regalia を王の手にもどすことを要し、又 regalia を訴被選挙者である司教の手にかえすためには、王に fidelitas を捧げることが要すると云う相関関係をも同時に示している。この限りにおいて、これらの手続の間にはさまる、訴被選挙者の確認の手続は二次的なものとなり、王と司教座の恒常的な関係は regalia の動きによつてとらえられる。この観点が、「王の司教座」(évêchés royaux) と云う概念を導き出したものであり、我々が問題としている時期の直前、即ち十二世紀後半の Louis VII の治世について、今日ほぼ確定された「王の司教区」を表示すれば、次頁の表の如くである。<sup>(10)</sup>

この表の中に、我々が当面の問題にしている Chartres, Reims, Amiens の三古典様式カテドラルをもつにいたる司教座のみならず、初期ゴシック様式に属する Sens, Senlis, Noyon, Laon, Paris の五カテドラルも、<sup>(11)</sup>又視野の中におくことを前提とした Soissons のそれも (第一章) 一応含まれている。従つて我々はゴシック様式適用の必要条件として、当該教会が上記の意味で「王の司教区」に属することを前提とみなすことを許されよう。

しかしながら、単にこの事のみによつて、我々はゴシック古典様式の成立が、上記三カテドラルに限られている事実を、充分には説明し得ない。たしかに王は、初期ゴシック期にすでにカテドラルを建設した司教座をも含めて、これらの若干に特殊な関心を示しているように見える。特に Louis VII が Senlis のカテドラル再建に示した関心<sup>(12)</sup> (1155頃)

Louis VII (1137—1180) 治下の ÉVÊCHÉS ROYAUX (11)		
	NEWMAN	PACAUT
PROVINCE DE TOURS		
Tours	+	+ ?
Le Mans	...	-
PROVINCE DE SENS		
Chartres	+	+
Orléans	+	+
Paris	+	+
Meaux	+	+ ?
Troyes	...	+ ? p
Sens	+	+
Auxerre	+	+ p
Nevers		- p
PROVINCE DE REIMS		
Beauvais	...	+
Senlis	...	+ ?
Soissons	+	+
Noyon-		Noyon
Tournai	+	Tournai + ?
Laon	+	+
Reims	+	+
Châlons/s/M.	+	+
Amiens	...	+
Arras	+	+
Thérouanne	...	+ p
PROVINCE DF LYON		
Autun	+	+
Chalon/s/S.	...	+ ? p
Langres	+	+
Mâcon	...	+ ? p
PROVINCE DE BOURGES		
Bourges	+	+ p
Le Puy	+	+ p
Mende	+	+
Clermont		+ p

は云うまでもなく、更に Philippe Auguste が Paris (1190)<sup>(1)</sup> 及び Chartres (1203)<sup>(1)</sup> に示した関心も、時期から考えて、何らかの意味でカテドラル再建工事に関係があるように思われる。しかしこうした王の側からの——間接的な——関心を示す史料は、一般化し得る程には存在しない。

他方教会側からの特殊な関心も、同様に充分に説得力をもつとは云えない。例えば von Simson は Chartres について、

curiae coronatae なる祭日の存在をもつて、この町（又は司教座）と王権との密接な結合を示すものと看做した。即ちこの日に王は、王冠をかぶり、Laudes regiae とともに登場するのである。<sup>(17)</sup> しかしながらこの風習は、Chartes を特殊化するに余りにも一般化しすぎている。<sup>(17)</sup> Reims については、フランス王戴冠式挙行の特権が連想される。しかしこれも、十二世紀末から十三世紀初にかけては、大司教 Guillaume の要請による教皇 Alexander III の bulla (1179) はあり、又一一九〇年に王自身もそれを認めてはいるが、依然としてそれ以前の時期におけると同様に、争われ得る特権でしかなかったと考えなければならない。<sup>(18)</sup> 更にいわゆる《Pairs de France》<sup>(19)</sup> についても一考すべきであるが、これに属する大司教、司教座中、初期ゴティックのカテドラルを有するものとしては Noyon と Laon、古典ゴティックのそれは Reims のみであるにすぎず、古典様式の成立にとつて、必ずしも共通の基盤を提供したとは考えられない。

王とこれら大司教区、司教区を結びつけるかに見える如上の諸要素が、その結合の証明、更にそのことからのゴティック古典様式の成立や適用に、必ずしも説得力のある説明を提供していないことは、以上で明らかである。この場合に我々は、もう一度司教が出現する瞬間、即ち選挙に立ちもどらねばならない。しかし、司教その人を王その人に結びつける機能を果しているものが、regalia ではなく、fidelitas であることに注目せねばならない。

十二世紀中葉以後、新司教が王に対して如何なる内容の fidelitas を行なつたかについて、我々は史料を有していない。しかしながら、Reims で大司教が一〇六八年頃成立した capitulum に対する誓約を、<sup>(21)</sup> ほとんどそのまま一二二四年に繰返すことを強いられていたことから、又こうした formula 独特の保守性から、我々がたまたま Reims 大司教 Arnoul について有する、九八九年の Hugues Capet と Robert とに対する誓約のテキスト (Textus libelli fidelitatis) が、——或はほぼそれと等しい内容が——繰返されていた公算が高い。たまたま誓約後に、<sup>(22)</sup> chirographe によつて、当事者双方が文書を交換したために残つたそのテキストは、次の通りである。

「神ノ恩寵ニヨリ Reims 大司教タルニイタリシ余 Arnoul (Arnulfus) ハ、フランス王 Hugues 及ビ Robert ニ、我が最モ清キ忠誠 (fides) ヲ保ツベキコトヲ、我が知り且力ノオヨブカギリ、彼ヲ〔王タチ〕ノアラユル企テニオイテ、助言 (consilium) ト助力 (auxilium) ヲ捧グベキコトヲ、彼ラノ敵ヲ、fidelitas ニオイテ、知ルカギリ、助言ニテモ助力ニテモ彼ラニ対シテ助ケザランコトヲ約ス。……シカシテソレヲ余ハ欲セズ且神モ喜ビタマワヌコトナガラ、コレヲ〔ノ義務〕カラ余ガ遠ザカリシナラバ、我ガスベテノ祝福ハ呪イト変ジ、我ガ日ハ縮マリ、且他ノ者ガ我ガ司教位ヲ受ケンコトヲ。〔且〕我ガ友ハ余ニ背キ、且永遠ニ敵タレ。……」<sup>(24)</sup>

この内容は、さかのぼつて八五九年に行なわれた Sens の大司教 Wenilo の誓約の形式内容と一致すると同時に、<sup>(25)</sup> 正しく十一世紀の Fulbert de Chartres による、有名な vassal の義務規定とも一致する。即ち fides と auxilium と consilium である。従つて、この fidelitas を口にすることは、十一世紀の教会人にとつては、正しく homagium を捧げることと同視され得る理由が充分に存在したことになる。

叙任権闘争の過程において、教皇 Urbanus II は Clermont の総公会議 (1095) で、

「episcopus 或ハ sacerdos が、王又ハ他ノ俗人ニ、手ニヨツテ (in manibus) ligia fidelitas ヲ行ナフヌヨウ」<sup>(26)</sup>

決定した。この決定自体が、当時 fidelitas の名の下に、司教たちが王に対して、「手ニヨツテ」homagium を行なつてゐたことを物語つてゐるが、この canon 自体は、結局 homagium ligium を禁じる効果をもつてはゐるが、fidelitas そのものを禁じたものではないと解し得る。一方 Trêve de Dieu をはじめとする Clermont の canones が、各 provincia へ持ちかえられ、それぞれ公会議に付されるに及んで、特に Rouen 大司教 Guillaume が上記 canon の換骨奪胎を敢えてした。一一九六年二月、Rouen 公会議の canon VIII. は云つ。

「如何ナル presbyter モ、俗人の homo トナラザルコト。何トナレバ、神ニヨツテ聖別サレ、且聖塗油ニヨツテ聖

トサレタ〔presbyterノ〕手ヲ、或ハ殺人、或ハ姦通、乃至ハ何ラカノ犯罪的ナ罪ニヨツテ汚サレテイル為ニ、聖別サレザル〔俗人ノ〕手ノ中ニ置クハ、フサワシカラザルガ故ニ。サレド sacerdotes ガ feudum ヲ俗人カラ保有シタル場合ニハ、ソレガ教会ニ屬セザレバ、免除サレテアルガゴトキ fidelitas ヲ彼〔俗人〕ニ行ナウコト。<sup>(28)</sup>】

Thomasin (1619—1695) はこれよりこの canones を比較して、次の三解釈を導入した。1. Rouen の canon は prêtres が俗人に行なう homage の禁止に限定された。従つて暗黙裡に évêques と abbés が王に homage を行なうことは許してゐる。2. Rouen の canon は prêtres あるは curés に対してをえ、彼らが fiefs を保有している場合には彼ら俗人に対して serment de fidélité をなすに代つて、従つて王に対してそれをなすについてはより多くの自由を許してゐる。3. 同様に concile de Rouen は、王は聖別されているが故に、その手は潔く。従つて王には homage をなす得る、との解釈をかゝしてゐる。<sup>(29)</sup>

如上の Ancien régime の gallicaniste の解釈は、部分的保留を伴なえば、十二世紀のフランス教会人のそれに投影し得るのではないであらうか。従つて当時、新司教が、王に対して——實質上——fidelitas に homage の効果を含ませていたか否かは、学説上の論争をこえて問題となる。一一九〇年に、Philippe Auguste が十字軍出征を目前にして、母后 Adèle de Champagne の Guillaume, archevêque de Reims に摂政として不在中の国事をなした Ordinance は、<sup>(30)</sup> だまたま司教位又は修道院長位が空位となつた場合の処置として、canonici, monachi の請願にもとづいて「自由選挙」(libera electio) の許可と実施とを規定し、ついで

「……シカンテ母后ト大司教ハ、ソノ間被選挙者が聖別又ハ祝福サレルマデ、regalia ヲソノ手ニ保チ、シカル上デ 反対スルトコトナク regalia ハ彼ニ返還サルムン。」<sup>(31)</sup>

と規定した。この箇処に fidelitas に関する言及がないのは、それがすでに自明であつた為であらうか。又は問題が多す

ゴティック古典様式カテドラルの成立とその背景 (藤)



きたが故に、賢明にも言及をされたのであろうか。

この間の事情は、*fidelitas* そのもの内容、形式から直接に結論づけ得ない以上、*fidelitas* が生ぜしめたと考えられる法的諸結果から判断を下さざるを得ないであろう。先ず *auxilium* について、就中問題となるのは軍役奉仕であろう。

此処で注目すべきは一一九七年八月初に出された Philippe Auguste の 'Reims の *capitulum* に対する従軍要請である。この要請は「Beata Maria Remensis の *prepositus*, *decanus* 及び全 *capitulum*」に宛てられて居り、次の如き内容をもち。

「新ニシテ且前代未聞ノ事態ガ突発セルニヨツテ、若シ朕ガ *auxilia* ヲ要請シタルタメシトナキガゴトキコトヲ汝ラニ乞ウモ、汝ラノ心ハ驚キ且動揺スルコトナカルベシ。汝ラモ知ラサレタランモ、朕ガ *comes* Flandrie ニ、ソノ同身分者 (*pares*, *pairs*) ニヨル裁判ヲ行ナワント準備セル折シモ、ソノコトニハ、多クノ列席者ガツラナリ、且シバシバ使者ヲ〔モツテ書面ヲ〕ツカワセシニモカカワラズ、同人ハ、朕ニ捧ゲタル *fidelitas* ト *hominium* ノ誓イヲ無視シテ、タダニヒソカニイギリス王ノ陰謀ニ加担セシノミナラズ、更ニ又朕ニ挑戦スルノ無暴ヲスラ敢エテセリ。…カカル陰謀者ノ非ヲ抑圧センガタメニ、朕ノ *gentes* トヒロク朕ノ *fideles* トヲ、或ハ朕ノ頭 (*caput*) ヲ、或ハ王国ノ王冠ヲ防禦スベク、来ル聖母昇天祝日前ノ主日ニ、戦争 (*bellum*) ノ名ニオイテ、Perona (*Péronne*) ニ召喚シ召集セントスルニツキ、汝ラニ切ナル懇願ト熱意トヲモツテ〔助ケヲ〕求ム。且汝ラガ朕ト王国トニ負ウ *fides* ニヨツテ、*comes* Flandrie トソノ〔軍〕トニ対シテ、朕ノ頭ト王国ノ王冠ノ防禦ノタメニ朕トトモニ戦ウベク、ヒロク汝ラノ *gentes* ヲ武装セシメテ、上記主日ニ Perona ニテ朕ノモトニアルヨウアラユル遅延ヲサケテ送ルベク朕ハ要求ス。又、コノ汝ラノ *auxilium* ノ賦課ガ、汝ラニトリテ、汝ラガ従来朕ニ負ワザリシゴトキ、何ラカノ慣習法ノ義務トナルハ、朕ノ欲セザル所ニツキ、〔コノ点〕確信セラレタシ。…。」<sup>(88)</sup>

王国の王冠の防衛戦争という名目で飾られてはいるが、事實は *comte de Flandre* の王に対する *hommage* 違反行為——法廷への出廷義務の不履行——に対する戦争に、*auxilium* 即ち軍役奉仕を懇願する王のこの書簡について、我々は次の二点に留意すべきである。第一にそれが——大司教に対してではなく——*Reims* の *capitulum* に宛てられていることであり、第二にこの要求が、先例にもなく、<sup>(44)</sup> 又今後も「慣習法的義務」にはならないと云う言及があることである。便宜上第二点から考察すると、軍役奉仕の要求は、決してこれのみに留まらず、間もなく問題化して係争に発展した模様である。何となれば、一二〇七年十月に、*Reims* 大司教 *Albericus* 以下、*Beauvais*, *Noyon*, *Tournai*, *Nevers*, *Laon* の司教の名で、次の事実が確認されたからである。

「... *M. prepositus*, *B. decanus*, *H. cantor*, *M. de Lagerio* 及 *un* 他 *Reims* の *canonici* は、*capitulum* を代表シテ、... *francus* 王 *Philippus* と *Reims* の *capitulum* の間テ争ワレタル諸係争ニシキ、下記ノ通り記載シタ。上記 *canonici* は、全 *capitulum* に代シテ王ニ次ノコトヲ承認シタ。フランス王国ニオイテ、キリスト教圏ヲ通ジテ、王冠ト王国ノ防禦ノタメニナサレルヲ常トスル、〔軍事〕召集 (*submonitio*) ガアリタル際ニハ、他ノフランスノ *capitula* ノ如クニナス義務ヲ有シ、且コレヲ果スベキモノトスル。王ハ当該 [*canonicus*] ガスベテノ *servitium* カラ永遠ニ解放サレテアルヲ承認シタ。且上記王モ、*capitulum* を代表スル上記 *canonici* モ、当該係争ヲ機トシテ従来作製サレタルモノハ、書面デアレ、他ノモノデアレ、何モノタリトモ、双方ニ対シコノ〔協定〕ニ反シテ、何ラ効力ヲ有セザルコトヲ同意シタ。...」<sup>(45)</sup>

かくして事態は一二一四年七月二十七日の *Bouvines* に到るのであるが、<sup>(46)</sup> 何故に *Reims* のみならず、全 *capitulum* が王に対して軍役奉仕を義務づけられたのであろうか。 *Gaudemet* はその根拠を *capitulum* がその *seigneur collectif* である《*la mense capitulaire*》に求めた。しかしながら彼はこれと《*des obligations féodales, en particulier le service*》

de l'ost」との相関関係を十分に説明し得たとは考えられぬ。Philippe Auguste の一一九〇年の Ordonnance は、次のように述べられている。

「……若シ何ラカノ教会ノ prebenda 或ハ beneficium ガ空イタナラバ、ソノ都度 regalia ハ我ガ手ニ来タリ、母后ト大司教(Guillaume)ハ、能ウ限リヨリ良クヨリ誠実ニ、……誠実ニシテ学識アル人物ニ授ケルモノトスル。……」<sup>(87)</sup>

この条項は、独立して取扱われるべきではなく、前註<sup>(86)</sup>所掲の、同一 Ordonnance 中に見られる、司教、修道院長の regalia の規定と共に考察するべきではないだろうか。その場合に、教会自体は厳禁している<sup>(88)</sup>《la mense capitulaire》の構成要素とも考えられる prebenda や beneficium の俗人の手による授受、——これは同時にそれによつて裏づけられている職(honor)そのものの授受になる——は、Gaudemet が前提としてゐると推定されるように、ある《mense》について常時王の手から行われるのではなく、司教の空位期間中、droit de régale の一部として行われると解釈せねばならぬことになる。かかる意味での bénéfices ecclésiastiques の司教空位中における授与権は、カペー家によつて、Louis IX 以後はじめて争われ得ない権利となつた。<sup>(89)</sup>

従つて我々はここで別の解釈を試みなければならぬ。Reims の capitulum の軍役奉仕の当否が争われていた一一九七年と一一〇七年の間、一一〇一年十二月に、Philippe Auguste は突然 Reims の canonici とその homines と res とを「朕ノ homines ト同様ニ」protectio の下においた。<sup>(90)</sup> この日付は、大司教 Guillaume の死(v. id. septem, 1202.)<sup>(91)</sup> の日付に先立つこと約半年であるから、特にこの時期に王の保護を必要とする事態が Reims にあつたとは考えられない。唯一の可能性は、一一九七年には——恐らくは大司教 Guillaume の黙認裡に、先例としない条件で課した軍役奉仕を慣習化する根拠を与えるために、大司教の死に先立つてとられた措置ではなかつたかと云うことである。この前提の下に以下の推定が可能となる。一一九七年前後に大司教・司教の fidelitas は、homage 的効果をもつものと考えられるに

いたしたが、王にとつてはかつては摂政であり叔父でもある Guillaume の手を血でけがすことをおそれ、それを懇願の形で capitulum に転嫁した。一方 Guillaume の capitulum 改革の主眼の二つは、canonici 相互間及び彼らと大司教の間を homage で結びつける点にあつたから（第三章）、この限りでは capitulum は王の vassesseur にあたる。従つて Guillaume の死を間にはさんで、一二〇一年には微弱ながらこれを王に直接結びつける方策を講じ、然る上で、一二〇七年に、本来大司教が負うべき封建的軍役奉仕を、最終的に capitulum の義務として慣習法化したものである。

次に auxilium の一とつて gistum (droit de gîte)<sup>(43)</sup> を検討しよう。我々は幸ひにつつ一二二三年と一二二六年の Chambre des Comptes の収入リストの断片を有してゐり、その何れもが gistum を金額で記載してゐる。一二二三年、即ち Louis VIII 戴冠の年には、

「戴冠ノ前夜ト当日、Reims ニテ、4000 lib.」

との記載があり、その翌日の Soissons での gistum 120 lib.<sup>(44)</sup> と比較する場合に、Reims の gistum が——明らかに戴冠式特権獲得の努力と併行して——戴冠式前後の王の滞在に集中し、定額化してゐたことが明らかになる。しかしながらこの金額は、当時の大司教 Guillaume de Joinville にとつては、容易に支出し得るものでなかつたことを、戴冠式直後に Louis VIII が Reims の commune の echevins 及び市民に宛てた書簡が示してゐる。

「……愛スル朕ノ fidelis タル Reims 大司教 Guillaume ハ、朕ノ戴冠ニオイテ、大イナル且重大ナル費エヲナシ、〔ソノ額ハ〕汝ラヤ、彼〔大司教〕ノ土地ノ他ノモノノ助力ガナケレバ、支払イニ事カク〔程ノ〕モノデアル。朕ハ汝ラニ、コレラノ金銭ヲ支払ウニ際シテ、彼ニ助力ヲナスコトヲ求メル。コノコトハ、単ニ大司教自身ノミナラズ朕自カラモ汝ラニ、ソレヲナスヨウニ擬メネバナラヌ程ノモノデアル。……」<sup>(45)</sup>

一二二六年分の断片は、同年十一月の St. Louis の戴冠式に際して、王の滞在の直接経費が、計 5053 lib. 14 s. しか

ゴテ、イック古典様式カテドラルの成立とその背景（森）

したことを示す。<sup>(46)</sup> 同時にこの年の「プリデノ収入」(Recepta Parisiensis) は「費田を記す」に「Reims 大司教カラ 1000 lib.」と記しているが、これは一応定額化していた金額 4000 lib. との差額を、一時王が立替えて、直ちにその返済を受けたものであろうか。

同年の同一欄に「Chartes 司教ノ gisum トミンテ 110 lib.」の記載があり、Chartes 司教も王に gisum を負っていたこと、又その額は、前掲 Soissons の場合と比較して、ほぼ当時の相場を示していることが明らかになる。Amiens につづいて、一一八五年に Philippe d'Alsace, comte de Flandre から王が comte d'Amiens を引いた際に、それが Amiens 教会の feudum であるが、「…当該教会ノノノ feudum ヲ hominium ヲナスコトナク朕ガ保有スルコトヲ許した。何となれば、王は王である限り「…何者ニモ hominium ヲナスベキデモナク、又ナシ得ヌカラデマル。」その代償として王は「…上記教会ト司教ヲ、全テ朕ノ procuratio ト serviens カラ解除スル…ヨウニ命ズル。」この条件は「朕ト朕ノ子孫ガフランス王」である限り有効なのであるが、この procuratio と serviens とは「旧ク他ノ Amiens 司教タチガ慣行シ来シタトコロ」に「王」ノ droit de gite と解される。<sup>(47)</sup> 即ち Amiens 司教は、王の droit de régale の下にあって同時に、comte d'Amiens につづいて王の suzerain である。而して王から hommage を受けない代償として、この司教は droit de gite を免除された。第一章で指摘した Amiens のカタドラルに見られる、他の「カタドラルとの微妙な相異は、或はこうした封建的關係における差異を反映しているのかも知れない。

consilium につづいては、正しく裁判権が問題となる。Reims にあつては、一一三五年に échevins と市民が騒乱をおこし、それが端緒となつて裁判権の相互的主張が明らかになる。archidiaconus が彼等市民たちを破門に処し、ついで王にも責任を問わんとしたのに対し、<sup>(48)</sup> 王は報復措置として、Reims の canonicus Thomas de Bellomescio を追放し、あわせて Soissons の Sainte Marie 修道院の新修道院長に regalia の返還を拒否し、Soissons 司教は、regalia 返還以前に新修

道院長に祝福を与ええることを禁じた。のみならず、新修道院長を *benedicenda* として教会に受入れることを *capitulum* に禁じ、*balli* をして、当該修道院の聖遺物を持ちさらしめた。王は「更ニ俗権法廷デ〔彼ラ教会人ヲ〕被破門者タチ (Reims の *echeyins* と市民) ト係争セシメントシ、更ニ俗権法廷ニオケル決闘デ、教会人ヲシテ、〔彼ラ市民ガ〕ソノ *homines de corpore デアル* トヲ証明」せしめんとした。<sup>50</sup> 同年七月二十三日、*Saint-Quentin* で開かれた *province de Reims* の公会議は、王に対して如上の *critiques* をかかけ、此処から以後数年にわたる、複雑な裁判権上の紛争が展開されることとなる。<sup>51</sup>

*Saint-Quentin* の公会議は上述の *critiques* に関して次の決定を行つた。

「即チ王ハ *Reims* 教会ノ件ニツキ、使徒ノ權威ニヨツテ *Reims* 市民ニ下シタ〔破門〕宣告ニツキ、*Reims* 〔大司教〕ヲ信ゼネバナラズ、又王ハ、ソノタメニ彼ラ〔市民〕ガ破門ヲ宣告サレタ事柄ニツキ、何ラノ *inquisitio* ヲモナスベキデハナイ。……」

更ニ *Reims* 〔大司教〕ガ、市民タチガソノタメニ破門サレタル非行ヲ償ナウ際ニ、王ニ援助ヲ提供スベク要求シタ如クニ、王ハ彼 (大司教) ニ援助を提供スル義務ガアリ、且ソレニツキ何ラノ *inquisitio* ヲモナスベキデハナイ……。更ニ *Reims* 大司教ハ、彼ノ一身ニ関スル殺人又ハ他の犯罪ノタメニ〔王ノ〕*justiciarii* ヤ *fideles* ニヨル王ノ法廷ニオイテ、*Reims* 市民ニ答エル義務ハナイ。シカシテ、出廷拒否 (*defectus*) デナイ限りハ、他ニツイテモ〔同様デアル。又〔定メラレタ〕日ニ、王ノ前ニ、特ニ破門サレタモノドモトトモニ集マラナカツタトシテモ、ソレハ出廷拒否デハナイ。〕

これらと共に、この公会議は、これらの決定を大司教自身及び *capitulum* の使者が王に直接歎願すべきことを決定し、<sup>52</sup> 事実同月二十九日付で王への歎願書が作製された。<sup>53</sup> この段階における双方の根本的な主張は、教会側は破門宣告の正当性

——管轄上も又量刑上も——と、王は——戴冠の際の宣誓からしても——この執行を無条件に認め且助けるべきだと云うにあり、王側は、この問題の裁判権は王にあり、大司教側はこれを無視し且拒否したと云うにあるようである。歎願に始まつた教会側の態度は、八月五日 Compiègne の公会議で急変した。即ち

「全 concilium ハ、Reims 教会ト大司教ノ件、及ビ Reims ノ canonicus Thoma de Bello Manso ノ追放トニツイテ、王ガ、大司教ト属司教ヲチニヨツテ喚問サルベシトノ意見ノ一致ヲ見タ……」<sup>(54)</sup>

しかも王が喚問に応じない場合の懲罰の適用をも予告してゐるのである (ad penam procedetur contra regem)<sup>(55)</sup>。この召喚は九月八日までに二度繰返され、<sup>(56)</sup> 同月十五日教皇 Gregorius IX が、Reims の属司教たちに、大司教をあくまで助けるやうにとの要請を書送つた時には、問題の所在は更に局限されていた。即ち「大司教ハ Reims ノ civitas ノ temporalis ノ主デアリ、echevins ヤ市民ハ大司教ノ fideles デアリ、特別ナ息子ヲチデアアルベキニモカカワラズ、」母なる教会への暴行に対して「破門ノ宣告ヲ発シ、」しかもそれが阻止されることは、「ガリアノ、且ヒロク一般ノ教会ノ自由ニ対スル」<sup>(57)</sup> 挑戦であるとするのである。これに対して遂に同じく九月に、duc de Bourgogne 以下四十一人以上におよぶフランス王國の barons と chevaliers<sup>(58)</sup> が Saint-Denis に集まつて、Reims の件について——併行して起つていた Beauvais の同様の事件についても——聖職者たちに対する告訴状を作製して教皇に宛てた。彼らの主張は次の如くである。

「……Reims ノ大司教モ Beauvais ノ司教モ、彼(王)ノ homines ligii デアリ、且 fideles デアリ、彼カラ homagium ニヨツテ、ソノ temporalia ヲ paritas (=paire) 及ビ baronia トシテ保有シテイル。彼ラソノ中デ、タダニソノ (王ノ) 法廷テ temporalia ニツキ答ヘルヲ欲セザルノミカ、更ニソノ法廷テ法ヲ行ナイ或イハ更ニ「法ヲ」守ルコトヲモ「欲セザル」、不敵サヲ敢エテシタ。……」<sup>(59)</sup>

こうして、一二三五年九月中に、当事者双方の主張は、まったく原理的なそれに還元されてしまつた。そして十一月十

四日に *Senlis* で開かれた *province de Reims* の公会議は、王が教度の召喚に応じなかつた故をもつて、「*province de Reims* 内ニアル王ノ全 *dominium* ニ *interdictum* ヲ宣シ、」又「コノ懲罰ニ従ワザル全司教ニ破門ヲ宣告」した。<sup>(60)</sup>これと併行して教会側は *enquêtes* を開始し、係争は翌一三三六年にいたつて新局面を示すにいたる。

一三三六年一月十三日に教皇は、*Reims* の *capitulum* に、*Reims* の *echevins* をローマの法廷に喚問した結果を報じた。この法廷では、*capitulum* 側も *echevins* 側もそれぞれ *procurator* を立てて争つたが、先ず *capitulum* 側の *procurator* は「*W[ilhelmus]* *archiepiscopus* (= *Guillaume de Champagne*) ニヨツテナサレタコトが、無効トサレルカ、又ハ無効ト宣告サレルコトヲ請ウタ。」即ち

「ソレガ何デアロウトモ、又何カラ免除サレテイヨウトモ、如何ナル名デ呼バレテイヨウトモ、大司教ノ *cives bannales* カラ *echevins* ヲ選ビ又ハ任命スルコトニツキ、又彼ラニ、大司教ノ *bannum* ト俗権裁判権ノ下ニ存スル市民ヲ裁クベキ権限ヲ賦与セルコトニツイテ、……」

これらは「法ノ形式ニ反シ、且 *capitulum* ノ同意ナシニ」行なわれたものであるからである。更に *capitulum* 側は騒乱の際の損害賠償三千マルクを要求して論告を結ぶ。<sup>(61)</sup> 此処で注目すべきは、*Guillaume de Champagne* が、*echevins* に裁判権を与えたことは非難されてはいるが、彼 *Guillaume* が一一八二年の *commune* 特許状で同時に導入した *bannum* と云う概念は、此処では大司教の俗権裁判権の裏づけとして利用されている点である。この *bannum* は、大司教 *Guillaume* が、恐らくはカロリング朝の *capitularia* の中から採用し、<sup>(62)</sup> 王と *commune* との——*feodal* な——関係から、大司教と市民との間に、事実上存在する支配関係を区別するために使つたものではないであらうか。

*Reims* 市民の *procurator* は反論する。

「……*echevins* (*scabini*) ガソレニヨツテ民事刑事ノ諸件ヲ裁ク *Reims* ノ *echevinage* (*scabinatus*) ハ「王ノ *feudum*

コティック古典様式カテドラルの成立とその背景(森)



ノ一部デアル。何トナレバ、ソレハ Reims ノ civitas ニ附随スルモノニ属シ、ソレ (civitas) ヲ Reims ノ大司教ハ諸王カラ feudum トシテ得テイルガ故ニ、同上ノ res (= reus = scabinatus) ハ feudalis デアル。ソコカラ更ニ、同上〔市民〕ハ俗人デアリ、ソレニツイテ争ワレテイル res モ secularis デアルカラ、彼ラ〔市民〕ハ、教会裁判官ニデハナク、原告ハ被告ノ法廷〔藉〕ニ規則的ニ帰属セシメラレル〔ト云ウ原則〕ニヨツテ、俗権〔裁判官〕ニ引ワタサルベキデアル。彼ラガ服従スル大司教個人ガ教会人デアルコトハ、支障トハナリ得ナイデアロウ。何トナレバカカル feudum ヲ大司教ハ聖職者トシテデハナク、俗人トシテ得タノデアルカラ。…〔64〕

この係争は、一応三月二十七日に、市民側が大司教側に、損害賠償として 10,000 lib. paris. 支払うと云う条件で片がついた。<sup>(65)</sup>しかしその件については、一月中に Louis IX が、損害額見積について bailli へ inquisitio を指示し、又金銭調達についても指示している事によつても裏づけられるように、原則論を離れて、賠償と云う方法で事件を終らせる意図は王のものであつた (de mandato domini regis)<sup>(66)</sup>。これは同時に係争中の市民や barons の発言が王の意志を体して行なわれたこと、又法廷論争によつて、この先これらの発言を傷つけまいとする王の政策を暗示している。

この係争事件の余震は、ほとんど十三世紀前半期を通じて感じられるが、本稿に必要な結論はすでに以上から充分にのみ取ることが出来る。即ち consilium によつて、裁判権上王の側は明らかに大司教の temporalia (= regalia) のそれをもつて王に帰属するものと考えていた。そしてそれは、regalia が feudum だからであり、これを大司教が fidelitas をもつて取得することは、一人の vassal としてであつて、聖職者としてではないからである。この主張に対して、一応それを尊重しながら、大司教としての temporalia への発言権を保留するために Guillaume de Champagne が導入した概念 bannum が対立するのである。

以上の考察は我々の当面する時期について、少なくとも王の側からすれば、司教、大司教の fidelitas が homagium

と同一効果を有することを明らかにした。しかも、この効果の、法的に明確な規定も亦、十二世紀末から十三世紀初に次第に形成されているように思われる。こうした傾向に直面して、司教たちがこうした観念を無条件に受け入れ得るか否かは、その多くを個々の司教の立場、人格、家系等に負うているように思われる。他面、教会側からの rigoriste な反論が予想される場合には、王側は其処にある種の含みを持たせておく。後者の場合について、例えば軍役奉仕や裁判権問題のように、多くの場合に Guillaume de Champagne の影がちらつき、彼の死と共に、問題が表面化して、係争に発展している点は注目に値する。

Guillaume de Champagne は、Champagne 伯家の出じり、Louis VII の王妃、Philippe Auguste の母、Adèle de Champagne の兄弟である。一一九〇年以後 Philippe Auguste の十字軍出征期間の前後には、正しく Capet-Champagne 連合政権とも呼び得る期間があった。しかも彼の経歴は、Chartres 司教 (1165—1176)、Sens 大司教 (1168—1176)、Reims 大司教 (1176—1202) を歴任している。従つて彼は Sens においては完成したばかりの三層構造、オジュー六分穹窿のカテドラルの主であり、Chartres では、一一五五年完成の正面ナルテックス (Portail Royal) を経験した (第一章) 事になる。総じて彼の経歴は、三層構造のゴシックとその軌跡を一にするのである。

此処で我々には、古典様式を成立させた三カテドラルについて、大司教、司教各個人の出自の研究が要請されるのであるが、現段階ではそれを充分には果し得ず、一応の試みに留めたい。

Chartres は、Portail Royal を着工完成せしめた Geoffrey (1116—1149) と Gauzin (1149—1155) は、何れも Chartres 地方の名門 de Lèves 家の出身で、叔父と甥であり、何れも王に近かつた。現カテドラルを着上せしめた Renaud de Mouzon (1182—1217) は、duc de Bar (Bar-le-Duc) の家柄であり、母、Adele de Champagne や Guillaume の姉妹の息子であり、従つて Philippe Auguste の従兄弟である。更に Chartres の regalia は、

Guillaume の父' comte de Champagne, Thibaud le Grand が' comte de Blois et Chartres として (Thibaud IV)' 一四九九年に regalia を、一王カラ feudum トンテ保有シテイル」と主張して要求したことがある。<sup>(21)</sup> 要するにこの司教座は「王の司教座」であることは云うまでもないが、その司教の出身とともに、Champagne 色が著しく、しかも彼らは終始個人としても王に忠実であつたと考えられる。

Reims についで、カテドラル着工当時の大司教 Albericus (Aubry, Albéric de Humbert, 1207—1218) は、その出自が不明である。彼の死亡告知 (Notitia de obitu) も、その点には一言もふれていない。<sup>(22)</sup> そもそも彼が選挙された際に、教皇 Innocentius III はその選挙の合法性に疑いを持つた。<sup>(23)</sup> 更に彼の大司教としての最初の仕事は、恐らくは前述の Reims の capitulum が王に軍事奉仕の義務を負う事の確認であつたこと、<sup>(24)</sup> 王自身、一二二一年には、Reims の echevins 等に対して、「Reims ノ市門ノ鍵ヲ Reims 大司教ニ、如何ナル反対モ遲念モナク返還スル」こと、「彼ノ bannum ヲ……遵守スル」ことを命じている点等から、恐らくは王の手が極めて強く働いた人選ではなかつたであらうか。Champagne 伯 Thibaud IV の大司教に対する hommage 文書は、両者の lignage 関係には言及していない。<sup>(25)</sup>

Albericus をついで Willelmus (Guillaume de Joinville, 1219—1226) が、王、特に彼が戴冠せしめた Louis VIII に対して忠誠であつたことは余りにも有名で、その最期は王に随行した Albigois 十字軍の帰途であつた。<sup>(26)</sup> 出自 de Joinville 家は、例えば Geoffroy de Joinville が Blanche が王の femme lige となるに際して、Blanche 側の証人であつたことからも知られるように、Champagne 伯家に忠誠である。又この家は一二五二年以後、Champagne の sénéchal を独占し続けた。<sup>(27)</sup>

次の Henricus (Henri, 1226—1240) についで、Champagne 伯 Thibaud IV の父の母 Blanche の彼に対する hommage 文書が、彼を「我ノ父系血縁者」(noster consanguineus) と呼んでゐるから、<sup>(28)</sup> 疑いもなく Champagne 伯家

の出身である。以上の如くして、Reimsの大司教についても、<sup>(87)</sup> ほぼ Chartresの司教と同様な状態を立証し得る。

Amiensを着上せしめた Eyrard de Fouilly は土地の各門の出身と考えられる。<sup>(88)</sup> 此処の司教について、筆者は目下殆んど史料を持たないが、司教 Thibaut d'Heilly (1169—1204) の如く、Guillaume de Champagneの近親者もあり、<sup>(89)</sup> 必<sup>(90)</sup>ずしも Champagne 色がなくもなさう。目下の所 Amiens には、上述の如く、司教が comté d'Amiens については王の suzerain である点を重視する他はなさう。Soissons については、<sup>(91)</sup> この司教がたえず Reimsの大司教と同一の行動をとっていること、更に彼らが王の vassaux であることを指摘するに留めたい。

古典様式ゴシックのカテドラルを成立せしめた大司教、司教と王との関係についての以上の考察は我々に二つの結論を与える。第一に、彼らの王との結びつきは、<sup>(92)</sup> すでに domaine royal と同じの domaine ecclésiastique のそれではなく、この時期以後は少なくとも、彼らが王に捧げる fidelitas には、明らかに hommage と同一の法的効果が予想されていた。即ち何らかの意味で、実質上の封建関係が存在することが必要条件である。第二に、各大司教、司教個人について、比較的 Champagne との結びつきが強い。少なくとも、王に忠誠であると同時に、Champagne へ何らかの親近感を持つていたと信せられる節が多い。第一と第二の要素が交わる点に、古典的ゴシック様式のカテドラルが成立したと考えれば、これらカテドラル群の存在は——Soissonsをも含めて——地理的にも時間的にも無理なく説明され得るのではないであらうか。又その後のレイヨナント様式の展開が、Pierre de Montreau 以下、Champagne 系の建築家によって推進されたことも、<sup>(93)</sup> 此処から説明出来るかも知れない。

#### 註

- (87) P. Imbart de la Tour, *Les élections épiscopales dans l'église de France du IX<sup>e</sup> au XII<sup>e</sup> siècle, Etude sur la décadence du*

*principe électif*, 814-1150, Paris, 1891; M. Pacaut, *Louis VII et les élections épiscopales dans le royaume de France*, Paris, 1957, pp. 33-57.

ゴシック古典様式カテドラルの成立とその背景(森)

尚八項目の列挙は Pacaut, *loc. cit.*, p. 56. に由じた。場合に依じてこれらの序列や内容に変化があること、又各項にそれぞれ多くのコメントを要することは云々までもないが、それについては、本稿に必要な限り、行論中にふれる。

- (2) 王の側からの如上の手続は、次の諸研究によつてほぼ確定された。

Imbart de la Tour, *op. cit.*, p. 439 et sp.; Pacaut, *op. cit.*, p. 53-54; A. Luchaire, *Histoire des institutions monarchiques de la France sous les premiers Capétiens* (987-1180), t. II, Paris, 1891, pp. 55-82; W. M. Newman, *Le domaine royal sous les premiers Capétiens* (987-1180), Paris, 1937, pp. 67-85; etc.

- (3) この論理は主として十四世紀以降、即ち Gallicisme 形成期にそれではならぬと想はれる。J. Gaudemet, *La collation par le roi de France des b'n. faces vacants en régale, des origines à la fin du XIV<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1935, p. 13, notes 1 et 2. 所引の十四世紀の arrêtés を参照せよ。しかしながら一般にこの理論は、十二世紀以降の諸例にも適用されてくる。恐らくは、後述する regalia, droit de régale を説明する上に、この立場が最も便利なためであらう。

尚 droit de dé pouilles とは、司教の死後、司教の財産(動産)を「金、銀、穀物、葡萄酒のみならず、家畜、収穫、及び家屋中にある家具類を羽目板にこいたるまで」収奪する権利(Luchaire, *op. cit.*, t. II, p. 66.) である。この権利は Louis

VII 以後、特に顯著に放棄の対象となつてゐる。droit de régale と混同される恐れもあるので、以下本稿ではあきらむ。尚前註所掲の諸研究及び後註(5)所引の史料を参照せよ。

- (4) G. J. Phillips, *Das Regalienrecht in Frankreich. Ein Beitrag zur Geschichte des Verhältnisses zwischen Staat und Kirche*, Halle, 1873; Gaudemet, *La collation*, p. 9 et sq.

Conventus Wormatiensis (a<sup>o</sup> 1122.) に於ては「《regalia》は正に司教の俗権の意味に用ゐられた。《Electoris (episcopus) autem a te regalia accipiat per sceptrum:… Ex aliis vero paribus imperii consecratus, infra sex menses regalia per sceptrum a te recipiat…» Possiones et regalia beati Petri, quae a principio huius discordiae, usque ad hodiernam diem, … restituo…» Mansi, *Sacr. concil. nova et ampl. coll.*, t. XXI, col. 273-274. 《regalia》の語自体は、正則や類して多量に用ゐる (cf. Du Gange, v<sup>o</sup> 《regalia》), ed. Henschel, t. VII, pp. 85-89.) 然るに Frédéric Barberousse が一五八年に Roncaglia に作製させたリスト (Libri Feudorum, II, 58, *Quae sint regalia*) を、決して droit régaliens の内容を決定し得たとは考えられなす。Worms 協定自体はフランスに適用されなかつたにしても、その用語法はフランスに移入されたことを、後に掲げる(註(6)) Suger の書簡が明らかに物語つてゐる。

- (5) Phillips, a. a. O. S. 17 u. s. w.; Luchaire, *op. cit.*, t. II, pp. 59 et sq.; Newrnan, *op. cit.*, p. 67; Gaudemet, *La col-*

lation, p. 17 et sq.

*Recueil des actes de Philippe Auguste*, t. I, éd. Delaborde, Paris, 1916, pp. 433-434, n° 358, 1190, (juillet), Vézelay : ... Quoniam Remensem ecclesiam, in qua regalem suscepimus unctionem, diligere tenemur et ampliari, ad preces karissimi avunculi et fidelis nostri Willielmi, ejusdem ecclesie archiepiscopi, statinus ut de cetero quicumque fuerit Remensis archiepiscopus, si cesserit vel decesserit, omnia mobilia ejus cum vasis et omni domorum suarum superlectili substantiando archiepiscopo integra reserventur, nisi ipse predecessor aliter de illis ordinaverit, ita quod servientes nostri vel successorum nostrorum in ea manus nullatenus extendant, nec extirpare nemora ne rumpere vivaria presumant, reservata tamen nobis et successoribus nostris omni auctoritate et jure quod, vacante sede, habere debemus in reddibus, proventibus et justiciis. Ut igitur hec omnia perpetue robur obtineat firmitatis, ...

「ノロヒオイト 朕が王〔タル〕ノ 塗油 (regalia unctio) モ受ケタ Reims ノ 教会ヲ、愛シ且豊カニシテ 義務アルベキガ故ニ、当該教会ノ 大司教ニシテ、朕ノ 親愛ナル 叔父ニシテテ fidelis タル Willielmus ノ 願イニヨリ、次ノ 如ク定メル。(此処に droit de depouilles ノ 廢止ガ 述べられてゐる。) 但シ以テ、ノコトノ 朕ノ 全 auctoritas ト 朕ノ 後継者トニ 保留サル。即チ、〔司教位ガ〕 空位トナラバ、收入ト 産物ト 裁判〔權〕ト ニツイテハ、朕ガ〔ソレヲ〕 有サネバナラヌ。……」

コティック古典様式カテドラルの成立とその背景(森)

《droit de dépouilles》ニ関する 福地 参照。

② Ch. Pfister, *Études sur le règne de Robert le Pieux* (996-1031), Paris, 1885, p. 204 et sq.

③ *Sugerii Epistola*, XIV, *ad capitulum Carnotense*, Migne, P. L., t. CLXXXVI, col. 1353 : ... praesentium latores nuntios nostros ex parte domini regis *ad recipienda et conservanda regalia* dilectioni vestrae delegamus, rogantes ut in quibus oportuerit, tanquam regni fideles, donec Ecclesiam vestram tanto et tam glorioso pastore viduatam, divina misericordia idoneo successore consueto ordine consoleretur, fideliter adjuvetis. ...

④ *Epistola decani et capituli (Carnotensis) ad Sugerium* (Ep. XIX), Migne, *Ibidem*, col. 1356 : Noverit... quod accepta a vobis regia licentia loco domini regis, ... pari voto unanimique consensu elegimus nobis et Ecclesiae nostrae in episcopum dominum Goslennum archidiaconum nostrum, ... Rogamus igitur... ut huic nostrae electioni... facta est, et quam vobis et viva voce et scripto praesentare curavimus, assensum praebere, et *electo nostro regalia reddere vice domini regis dignemini*. ...

⑤ *Sugerii Epistola* XX, *ad capitulum Carnotense*, Migne, *Ibidem*, col. 1356-1357 : Nos autem quantum ex parte domini regis, cuius vices agimus, facere habemus, *huic electioni libenter assensum praebemus*. De *regalibus* vero sicut in curia

dominorum regem francorum mos antiquus suisse dignoscitur, cum episcopus consecratus, et in palatium ex more canonico fuerit introductus, tunc ei reddentur omnia. Hic est enim reditionis ordo et consuetudo, ut, sicut diximus, in palatio *status regi et regno fidelitatem faciat, et sic demum regalia recipiat.*

- ② 《eveché royal》といひ、もつと十二世紀の概念ではなかつた。droit de régale が、seigneurs の手で行使される évêchés を évêchés seigneuriaux と呼ぶ、その行使者が王である場合に、同様の意味ではそれらを évêchés royaux と呼んだのは Imbart de la Tour, *op. cit.*, pp. 453-475. であり、その後には Phillips, a. a. O. S. 43. の Regalienrecht = Landeshoheit とよく考へ方があつた彼の立場の継承者は W. M. Newman である。彼によれば évêchés royaux とは「それらに對して王が droit de régale を有するものではない、必ずしも droit de dépouilles 或は司教を選び且確認する権利を要しない」(*op. cit.*, p. 68.)。Pacaut は原則的にこれを承認しながら「重大な保留」を付した。即ち「単に王による司教の確認(confirmation)の存在が立証し得るに留まる教会に關しても、我々はそれを《royale》とみなさねばならぬ。何となればこの法行為は、理論上 régale の存在を示しているからである」(*op. cit.*, pp. 59-60.)

- ③ 本表は Newman, *op. cit.*, p. 216 et sq.; Pacaut, *op. cit.*, pp. 64-70. によつて作製した。表中、+印はその存在が史料に

よつて確認し得るもの、+印は Newman が Louis VI 以前の確証はあるが、Louis VII 治下に史料を見出し得なかつたために判断を保留したもの(原則的には継続)、-印は Pacaut が不存在又はそれ以前の放棄の事実を確かめ得たもの、+印は Pacaut による「大きな保留」を示す。a は史料上 protectio の言及がある事を示す。Gaudemet, *op. cit.*, p. 13. 及び Pacaut, *op. cit.*, pp. 60-61. は、la régale の理論的根拠として王の protectio を重視する。教会に對する protectio は Philippe I<sup>er</sup> の戴冠に際しての宣誓 (professio) にも見られる如く(拙稿「王権の覚醒に就いて」歴史学研究 No. 176, p. 21. 参照)、王の基本的な義務の一つと考えられて居り、事実教会や修道院に對する protectio 文書も、決して数は少なくない。しかし本表が示すように、司教座に關しては比較的遠隔地にしか見られず、事実 Pacaut, *op. cit.* pp. 72 sq. の本表からは除いた例挙は、南仏に及ぶ。こうした地域的なずれと共に、筆者自身の重要性を痛感しながら、protectio を具體的に把握し得ないでいる事情にもよつて、以下本稿では protectio の問題に立入らぬことにする。尚本表からは Province de Bordeaux 即ち duché d'Aquitaine に属するものは、はぶかれてゐる。

- ④ 拙稿「初期ゴシック教会堂の成立とその社会的思想的背景」史学雑誌 六一—二参照。

- ⑤ A. Luchaire, *Etudes sur les actes de Louis VII*, Paris, 1885, p. 216-217, n° 363. Notre-Dame de Senlis 再建工事につき、全王国の「大司教、司教、修道院長及び聖職者」に、そ

の上で費用の援助を、聖職者等のために求め、quêteurs に轉  
格せしめたる書籍。

- ㉔ *Recueil des actes de Philippe Auguste*, t. I, p. 420-421, n°  
346, 1190, juin :... Cum ad ecclesiam Parisiensem specialem  
nostre dilectionis intendamus affectum, eam pre ceteris et  
ampliare volumus et honorare. Unde cum, ... statumus ut,  
si infra radium nostrum episcopatum Parisiensem vacare  
contigerit, quod circa *matriculariam* seu capiceriam ejusdem  
ecclesie fuerit corrigendum, de assensu et consilio avunculi  
nostri domini Willelmi, venerabilis Remorum archiepiscopi,  
ad provisionem Hervei decani et Petri cantoris Parisiensis  
emendetur...

直接上事に言及してはならぬが、(一)前文に特別な関心を  
示すにせよ、(二)王の御前出給の処置に於て、(三)  
matricularia (cf. Niemeyer, v° *ead.*) が教区法被執照  
職に於て、(四)それと同教が地位となつた場合を想定し  
ての、(五)その、(六)宗祭 Sens の管轄に属する、(七)そ  
の、(八)Guillaume, archevêque de Reims (十十字軍中の  
傑出)の、(九)特に著せられたる、(十)その、(十一)等の理由から、  
Dehborde は、(十二)その、(十三)上事條を、(十四)その、(十五)推定し  
て、(十六)その、(十七)を付したる、(十八)。

- ㉕ *Recueil des actes de Philippe Auguste*, t. II, éd. Delaborde  
et Petit-Dutaillis, Paris, 1943, p. 353, n° 780, 1203, déce-  
mbre :... universis amicis et fidelibus suis baronibus et aliis

「ロニヤック古典様式カナドラルの成立」の背景(終)

... Mandamus vobis et vos requirimus quatinus terram et  
hominnes ecclesie Beate Marie Carnotensis et res ad eam per-  
tineantes tanquam nostras proprias protegatis et defendatis ;  
... De eis quogue ad petitionem canonicorum ecclesie pre-  
dicte tantum faciatis quod proinde vobis uberes teneamur  
gratiarum actores. ...

一 條の protectio 文體 (參見 *Ibidem*, p. 266, n° 700. 後註  
③ 所記) の書式の相違から、その時期の特殊事情、即ち建設  
上事に關するもの、と推定。

- ㉖ Simson, *op. cit.*, p. 174.

㉗ Cf. Luchaire, *Hist. des instil.*, t. II, p. 73 ; P. E. Sch-  
ramm, *Der König von Frankreich, das Wesen der Monarchie  
vom 9. zum 16. Jahrhundert, Ein Kapitel aus der Geschichte  
des abendländischen States*, Bd. I, Weimar, 1960, S. 122,  
Bd. II, S. 81, Anm. 3-7 : R. Fawtier, *Les Capétiens et la  
France*, p. 76. 以下、その、(一) Chartres の curia coronata の  
條を、(二)その、(三)。

- ㉘ Varin, *Arch. adm.*, I, p. 381 ; cf. Jaffé-Wattenbach,  
*Regesta*, II, n° 13382, 1179, Apr. 13, Laterani :... In-  
super etiam auctoritate apostolica statumus, ut nemini nisi  
Remensi archiepiscopo licet regem Francorum innungere vel  
ei primam coronam imponere, sicut antiqua consuetudine  
fuerat obtentum. ... Philippe Auguste の、(一)その、(二)その、  
註③ 所記の、(三)參照。



⑧ Schramm, a. a. O., I, SS. 126-127. 註釋「王權の實體に就て」 pp. 18-19. 參照。

⑨ 《paire》に對する 衆和の P. Viollet, *Histoire de institutions politiques et administratives de la France*, t. III, Paris, 1903, p. 301 et sq.; Petit-Dutaillis, *La monarchie f odale*, pp. 265-267; Lot-Fawtier, *Hist. des instit.*, t. II, *Institutions royales*, Paris, 1958, p. 296 et 297, n. 1.

《pairs de France》は ducs de Bourgogne, de Normandie, de Guyenne, les comtes de Flandre, de Toulouse, Champagne; l'archevêque de Reims, les évêques de Beauvais, Noyon, Châlons-sur-Marne, Laon, Langre. の諸公を意味し大體數は成り、明らかに Charlemagne 伝承の影響下に成立した。主として裁判に関するもの、王法廷の同身分裁判の初出は一一五三年にさかのぼるが、明確に意識されるのは十三世紀以後である。しかも大きな影響力があつたとは考えられな。 comte de Toulouse, comte de Guyenne の存在は、感見によればその確立期が相当に上なる、すなわち comte de Champagne 以下の最も關係深き l'évêque de Langre が聖俗各ジャンヌの間に末尾にあることは、觀念の最終的な成立場所が Champagne ではないかとの疑いを持たせる。《paire》はトリエック様式の成立と、全く無關係とは云ひ切れないが、因果關係ではな、併行現象と見るべきであらう。トリエック世界觀を成立させた共同の基礎ジャンヌが問われるべきであらう。

⑩ 拙稿第二章(史淵、61, p. 91, 註⑥)。

⑪ Cf. Varin, *Arch. adm.*, I-2, pp. 533-536, n° C, juin 1224, Sententia qua archiepiscopus remensis condemnatur ad prestandum juramentum de consuetudinibus et libertatibus capituli remensis observandis, n° CI, juillet, 1224, Carta qua Guillelmus archiepiscopus remensis notum facit, quod capitulum remense sibi remisit prestationem corporalem iuramenti, in hac parte sibi personalem gratiam faciendo.

⑫ Richer, *Histoire de France*, (éd. Latouche, t. II, Paris, 1937,) lib. IV, § 29, 《Et ut penitus mentis conceptum aperiam, post jurationis sacramentum, cirographum ab eo scribendum puto. ... Jussus itaque cirographum bipertitum notavit, regi alterum, alterum sibi servavit.》

Chirographe といふ一枚の羊皮紙に二回文二種を書かれその中間に CIROGRAPHUM と記しその文字の所び切斷して成立した二種の文書が二種のジャンヌが同文であり、ジャンヌ証明となるに用いられる。

⑬ Richer, *Idem*, lib. IV, § 60, éd. Latouche, II, p. 246: Textus libelli fidelitatis Ar [nulfus]. Prolatus est itaque hanc textus seriem habens: Ego Ar [nulfus], gratia Dei praeveniente Remorum archiepiscopus, promitto regibus Francorum H [ugoni] et R [oberto] me fidem purissimam servaturam, consilium et auxilium eis secundum meum scire et posse in omnibus negotiis prebiturum; inimicis eorum nec consilio nec auxilio ad eorum in fidelitatem scienter adjuturum. Haec

in conspectu divinae majestatis, et beatorum scriptuum et otius aecclesiae assistens promitto, pro bene servatis laturus praemia aeternae beatitudinis. Si vero, quod nolo et quod absit, an his derivero, omnis benedictio mea convertatur in maledictionem, et fiant dies mei pauci, et episcopatum meum accipiat alter; recedant a me amici mei, sintque perpetuo inimici. Huic ego cirographo a me edito in testimonium benedictionis vel maledictionis meae subscribo, fratresque et illos meos ut subscribant rogo. Ego Ar [nultus] archiepiscopus subscripsi.

- ㊥ Boretius-Krause, *Capitularia regum Francorum*, t. II, Hannover, 1897, p. 450-451, n° 300, *Libellus proclamationis adversus Wenilonem*, 859. Jun. 14, c. 4. Denique eum seditione in regno nostro per homines inreverentes coeperunt crebrescere, consensu episcoporum ac ceterorum fidelium nostrorum *chyrographum* invicem conscripsimus, qualiter ego erga eos cooperante Domino agere vellem, et qualiter mihi *consilio et auxilio idem fideles nostri* abinde postmodum solatium ferre debuissent. Cum scripto Wenilo apud Baiernam villam propria manu subscripsit, sicut in praesenti videre potestis.

- ㊥ F. L. Ganshof, *Qu'est-ce que la féodalité?* 3e éd. revue et augm., pp. 111-113.

- ㊥ F. L. Ganshof, *Note sur l'apparition du nom de l'hommage*

コトイハツタ古典様式カナテドロルの成立とイネの背景(森)

*particulièrement en France, dans Aus Mittelalter und Neuzeit, Festschrift zum 70. Geburtstag von Gerhard Kallen, Bonn, 1957, pp. 29-41. 上の論文は Ganshof 氏の『hominium』をその語の起源を歴史的に追って 1031年 4月 10日 の地元の領主と領民との契約をめぐって Fulbert de Chartres 氏の書簡の宛先 Guillaume V, duc d'Aquitaine の宛頭にその語が用いられるのを指摘するに際しての論。*

- ㊥ Concilium Charomentanum, congregatum a. D. MXXCV... decembris, tempore Urbani papae II, Mansi, *Sacr. concil. nova et ampl. coll.*, t. XX, col. 817, c. XVII. Ne episcopus vel sacerdos regi vel alicui laico in manibus ligium fidelitatem faciat.

- ㊥ Concilium Rotomagensis, in quo decreta concilii Arvernensis relecta sunt: a Guillelmo archiepiscopo cum suffraganeis suis celebratum mense Februarii, anno MXXCVI, Mansi, *Sacr. concil. nova et ampl. coll.*, t. XX, col. 925, c. VIII. Nullus presbyter efficiatur homo laici. Quia indignum est, ut manus Deo consecratae, et per sacram unctionem sanctificatae mitantur inter manus non consecratae: quia est aut homicidia, vel adulter, aut cuiuslibet criminalis peccati obnoxius. Sed si feudum a laico sacerdos tenuerit, quod ad ecclesiam non pertineat, talem faciat ei fidelitatem quod securus sit.

- L. Thomassin, *Ancienne et nouvelle discipline de l'Eglise,*

t. IV, Nouv. éd., revue, corrigée et augmentée par M. André, Bar-le-Duc, 1865, (éd. orig., 1678-79), p. 465 sq. 前記所掲の canon を Guillaume le Roux の fidelitas をなすことからの Rome の pallium を受けることへ註しを添え、Fidelitas 義にふくむ註をなした。St. Anselme, archevêque de Cantorbéry を念頭にたどるに用いたことについては、その説を指摘する。然りすれば、この canon の作りかえが、先づ Rouen へ行なわれたのは当然である。

- ⑧ Thomassin, *op. cit.*, t. IV, p. 466. 聖 Imbart de la Tour, *op. cit.*, p. 397. 註——註記中の「*un*」は「*un*」から第三点を除くこと—— Thomassin の解釈を採ることにする。畢竟この場合は第三点に重畳しである。Gaudemet, *La collation*, p. 16. 彼は droit de régale が、原理上は如何なる princes 又は hauts barons があるべき性格のものであるにわかかわからず、「極度の速さか、王の privilège をふくまわれぬ」ことを主張する。如くであるが、この第三の解釈の適用がこの問題を解くかも知れない。

- ⑨ 例として Luchaire, *Hist. des institi.*, t. II, pp. 81-82, *passim*. 又 J. Flach, *Les Origines de l'ancienne France*, t. III, Paris, p. 253. Gaudemet を採用する Pacaut, *op. cit.*, p. 56. 上記と比較せよ。しかしながら、問題は Pacaut が考へるものが、fidelitas を hommage かの二義に用いたものであること。彼が、Luchaire の 教会を théoriquement et canoniquement の hommage を兼ねてゐる事を前提として、その homage

ecclésiastique の存在を前提としてゐることを知る。聖 Aldebert, évêque de Mende (Luchaire, *Louis VII*, p. 245, n° 452, a° 1161.) の如く、文書に「... et predicto episcopatu vobis, illustrissimo domino Dei gratia Francorum regi, *fidelitatem iuro.*」(Arch. dép. de la Lozère, série G, n° 39, pièce 1, citée par Pacaut, *op. cit.*, p. 56, n. 2.) であることは、Lavissee, *Histoire de France*, t. III-1, par A. Luchaire, Paris, 1902, p. 63. & Fawtier, *Les Capétiens*, p. 105. の如く、その「homages ecclésiastiques」の性質を述べたことが問題となる。

- ⑩ *Recueil des actes de Philippe Auguste*, I, p. 418, n° 345, 1190, (Juin), Paris, ... Si forte contigerit sedem episcopalem vel aliquam abbatiam regalem vacare, volumus ut canonici ecclesie vel monachi monasterii vacantis veniant ante regiam et archiepiscopum, sicut ante nos venient, et liberam electionem ab eis petant; et nos volumus quod sine contradictione eis concedant. Nos vero tam canonicos quam monachos monum, ut talem pastorem eligant qui Deo placeat et utilis sit regno. Regina autem et archiepiscopus tandu *regalia* in manu sua tenent, donc electus consecratus sit vel benedictus, et tunc *regalia* sine contradictione ei reddantur.

- ⑪ *Recueil des actes de Philippe Auguste*, II, pp. 115-116, n° 566, 1197, (premiers jours d') août: Philippus Dei gratia Francorum rex dilectis preposito, decano totique capitulo

Beate Marie Remensis salutem et dilectionem. Emergentibus nobis et inauditis casibus, non debet admirari aut moveri vestra dilectio si a vobis petimus que non conservimus auxilia postulare. Ad vos potest pervenisse quod cum parati essemus comiti Flandrie per pares suos iusticiam exhibere, idque pluries presenti presentes et quandoque per nuntios obtulissimus, ipsum, neglecto fidelitatis et hominii juramento nobis prescrito, non solum regi Anglie sub nota proditionis adhesionis, verum etiam usque in nos diffidendi temeritatem processisse. Et licet hec ad vos forsitan pervenerint, que nondum ad vos pervenerunt vobis innotescere facimus: videlicet quod idem comes terram nostram in multitudine gentium violenter intravit, in damnum corone, quod Deus avertat, vires suas exercens si possit. Ad cuius malitiam proditoris repellendam et debellendam, cum gentes nostras et universos fideles nostros, tum pro capite nostro, tum pro corona regni defendenda, evocaverimus et citaverimus nomine belli ad diem dominicam proximam ante festum Assumptionis beate Marie apud Peroram, vos prece sollicita et diligenti rogamus et per fidem quam nobis et regno debetis requirimus quatinus nobis adversum comitem Flandrie et suos pugnaturis pro defensione capituli nostri et corone regni gentes vestras cum armis universas imitaris, ita quod predicta die dominica sint ad nos apud Peroram, omni dilatione remota, certumque teneatis

「リチャード王の葬式ナンドラレルの成立」の附録(終)

quia nolimus ut hec auxilii vestri impensio vobis cedat in debitum alicuius consuetudinis quam nobis antea non debuisseis. Actum anno Domini M° C° XC° septimo, mense augusto.

⑧ 一二四四年の Reims 方面に侵入せんとした神羅ローマ皇帝 Heinrich V が中心となる軍を率いたるに「空の神々の」教令、諸侯の諸國中の軍を集結した中に「宗教 Reims の教令」が述べられている。(Suger, *Vita Ludovici*, Migne, P. L., t. CLXXXVI, col. 1318 sq.) Suger が「リチャード王の葬式」に引用している集約された文句は「リチャード王の葬式」の「附録」の「附録」に載っている。参照。

⑨ Varin, *Arch. alm.*, I-2, pp. 463-465, n° XXXIV, octobre, 1207: Albericus remensis, Ph. belvacensis, Stephanus noviomensis, Gosuinus tornacensis, Willelmus nivernensis ecclesiarum Dei patientia ministri humiles, et Renaudus ejusdem miseratione laudunensis electus, universis ad quos littere presentes pervenerint, salutem in Domino. Noveritis universitas vestra, quod M. prepositus, B. decanus, H. cantor, M. de Lagerio et quidam alii canonici remenses, ex parte capituli, cum litteris patentibus *de rato* in nostra presentia constituti, super contentionibus que inter dominum nostrum Philippum illustrem Francorum regem, et capitulum remensem (*sic*) vertebantur, composuerunt in hunc modum: Dicitur canonici pro toto capitulo recognoverunt eidem domino regi



なたらと語べ。何ふなれば、この權利の放棄せ。一一八五年の  
Amiens 條 出づへ homage 放棄の手續となつた事なる  
事、<sup>14</sup> 第 10°

⑤ Du Cange, *Glossarium*, t. IV, p. 73, v° *gista regis*: *Regis-  
tum et rotulus Camerae Computor. Parisiens. Ecclesiarum  
ac locorum aliorum Catalogus*. . . . *Gista quae dominus Rex  
cepit an. Dom. 1223.*

...

Vigilia et die Coronamenti, apud Remis, 4000. lib.  
(Sangerman. MS. Die post coronamentum ad nostram  
Dominam Suesion. Gistum 120. lib.)

...

⑥ Varin, *Arch. adm.*, I-2, pp. 527-531, n° XCIVII, août  
1223: Ludovicus, . . . dilectis suis scabnis et civibus in banno  
archiepiscopi remensis commemorantibus, salutem. Cum dilec-  
tus et fidelis noster Willermus remensis archiepiscopus mag-  
nas et graves in coronamento nostro fecerit expensas, nec  
sine vestro et aliorum de terra sua auxilio sufficiat ad solven-  
dam; mandamus vobis quatinus tale auxilium in solvenda  
pecunia illa faciatis eidem, quod non solum ipse, sed etiam  
nos ipsi vos in facto isto debeamus commendare; nec diffi-  
cultatem aliquam pretendatis, scientes quod si archiepiscopus  
etiam vellet vos a missione ista absolvi, nequaquam sustine-  
remus, cum nobis datum sit intelligi, quod id facere debetis.

Actum Senonis . . .

⑦ Varin, *Arch. adm.*, I-2, p. 539, n° CVI, Despens fais  
pour le couronnement du saint-roi Loys, ou mois de novem-  
bre 1226: Pain, 896 ll. — Pain le Roy, pastee et les facons,  
38 ll. — Vin, 991 ll. — Cuisine, 1356 ll. 4 den. — Cire et  
fruit, 138 ll. — La chambre du Roy, 914 ll. 10 s. — Des-  
pens pour la Roynne, 320 ll. — Pour les gaiges et hivroisons  
de l'ostel le Roy, et pour le Roy d'Outre-mer, 400 ll. Som-  
me toute, 5053 ll. 14 s.

⑧ Ch. Petit-Dutaillis, *Etude sur la vie et le regne de Louis  
VIII* (1187-1226), Paris, 1894, P. J. n° XIII, Recettes et  
dépenses d'un terme de 1226. I. - Recetta Parisiensis. — De  
archiepiscopo Remensi M. I. . . . — De gisto episcopi Carno-  
tensis CX I. . . .

⑨ *Revenet des vertes de Philippe Auguste*, I, pp. 169-170, n°  
139, 1185, du 21 avril au 31 octobre, Compiègne: . . . No-  
verint . . . quod, quando terram Ambianensem et comitatum  
Ambianensem, Philippo comite Flandrie id nobis relinquen-  
te, recepinus, fidem et devotionem quam ad nos habebat  
Ambianensis ecclesia dilucide cognovimus; . . . verum, cum  
feodus terre predicte et comitatus ad ecclesiam illam, ex eo  
quidem quod habet de nostro regali, pertineret et exinde  
sibi deberet hominum recipere, voluit hec ecclesia et benigni-  
ne concessit ut feodum suum absque faciendo hominio

teneremus, cum utique nemini facere debeamus hominum vel possimus. Ad quod ecclesie devotionem attendentes, dictam ecclesiam et episcopum ab omni procuratore nostra et servientium nostrorum absolvimus et quietos esse precepimus, quando nos et successores nostri reges Francorum terram Ambianensem et comitatum tenebimus: ita quod, si forte terram istam aliquis deinceps habuerit qui ecclesie Ambianensi possit hominum facere, hominum faciet episcopo de predicto feodo, et nostras procuraciones, sicut antiquitus ceteri Ambianenses episcopi consueverant, ab illo tempore in futurum exsolvet...

Cf. L. Halphen, *La place de la royauté dans le système féodal*, dans *A travers l'histoire du moyen âge*, 1950, pp. 268-269.

⑨ 1133年の commune de Reims の騎士の区割で「教團文書」の「*pro curia*」(Varin, *Arch. adm.*, I-2, pp. 579-582, n° CXL, 4 avril 1235, Epistola Gregorii pape IX ad episcopum silvanectensem, et igniacensem et S. Dyonisii remensis abbates, ...: Pothast, *Regesta*, I, n° 9874, "*Quod carissimus... rex*"); — Varin, *Id.*, pp. 601-603, n° CLIV, 11 oct. 1235, Litterae Gregorii pape IX, ad decanum et archidiaconum parisiensem, et Ferricum canonicum lingonensem, de tumultibus remensibus: Pothast, *Regesta*, I, n° 10031, "*Non minus pro*." 以下 Varin 註(以下同)。

Reims の decanus と capitulum から教皇に対して提出された請願(petitio)によれば、Reims の俗権裁判権は大司教 Guillaume (de Champagne) の發給した「*capitulum* の同意なく、市民に賦せられたが、上記 *capitulum* の土地の *burgenses* が同様 *capitulum* が大司教の土地に有する *cives* が *libri servientes* を負っているにもかかわらぬ、*capitulum* 自身が関知もせず、且不名譽な損害と評價するが如きある条件の下でなければ、*capitulum* は「土地に「*serviens*」に「*serviens*」を何れも納めると相互誓約を以て団結した (*inter se juramenti vinculo colligantes*)。商人たちも同調して不伏状態に入り、遂には「騎士に屈辱をウチノメキ立テ」(*in tumultu et ignominia proclamantur*)、血を流すまで一人の *canonicus* を「*ボナ*」にしたりした (n° CXL.)。この騎士は *Porta Martis* に生じたが、市民たちは「殺しあいのすえど、自陣の強化のために、公道上に壁をつくったのみか、*fratri minori* の家屋を占拠した。更に市民たちは防禦のために、道路の鋪石を「*モリ*」大ナル教会の工事ニマナラシキヤメント擲テ石ヲ用イ」(assumerunt pro munitione suarum publicarum, pavimenta viarum, tumbas coemeteriorum, et lapides ad fabricam majoris ecclesiae deputatos)」、更に「土地に俗語に *halae* と呼ハント」大司教の家屋のそばのを破壊した (n° CLIV)。  
このため彼が市民に對して *jurisdictio ordinaria* を有する *archidiaconus* が破「宣告を發し」、更に彼が *jurisdictio spiritalis et temporalis* を有する大司教が *echevins* (*scabini*) を奪

問せんとしたが、何ら真実の証言が得られなかつた。「ロコガ  
 眞マムルトスレン」教皇としては王に次の事を問うた。すなわち  
 「ロキ田に臣臣陳ヤンニナリス」(… regem rogandum du-  
 ximus et monendum)。「上記市民の請ヤンニケル無難ガ、請  
 ススキ無難ノ数々ヲ累積サセルトノナイヨウニ、カカル重大  
 ナル攻撃ガ許サレザルトヲ期待シ、上記市民ニ敵請ヲ課スル  
 コトニ同意スルヨウ、且大司教ニ強力ヲ援助モテヒルヨウ…  
 ..。」(ut prudenter attendens quod tam graves offense non  
 sunt aliquatenus tolerande, ne predictorum civium impunita  
 temerita temeritates acculmet puniendas, ad correptionem  
 predictorum taliter magnificente sue facorem apponat, et  
 archiepiscopo potentem (*sic*) auxilium tribuat,…) (n° CXL.)

⑧ この世では、在幕士同共ヤ臣に十三日、Saint-Quantin へ歸ル  
 べき province de Reims の冬繼に彼をレ奪ひ去る。Varin,  
*Arch. adm.*, I-2, pp. 584, -585, n° CXLV (=Mansi, *Sacr.  
 concil. nova et ampl. coll.*, t. XXIII, col. 365-367), Con-  
 ciliium remense apud S. Quatinum celebratum pro ecclasia-  
 sticis libertatibus provinciae remensis: … In bannicione  
 Thome de Bellomesso canonici remensis; in saisicione ho-  
 norum capituli sussionensis facta per dominum regem; et  
 in eo quod denegavit regalia electe B. Marie sussionensis  
 confirmate ab episcopo sussionensi; et in eo quod inhihuit  
 episcopo sussionensi, ne eam benediceret, nisi prius ab ipso  
 receptis regalibus; et de inhihicione facta capitulo, ne eam

コトヤノックト士頭兼大サナドールの成立ルベシの聖書 (終)

reciperet benedicendam in sua ecclasia; et in eo quod reli-  
 quas et alia sacra ejusdem monasterii per baillyvum suum  
 laicum fecit asportari. Item in eo quod in curia seculari  
 cum excommunicatis agentibus litigetur. Item in eo quod vult  
 quod persone ecclesiastice probent per duellum in curia se-  
 culari homines de corpore suos esse.

⑨ この教令は、ロコガ Gaudemet, *Les institutions, dans  
 Lot-Fawtier, Histoire des institt.*, t. III, pp. 276-278. 終  
 447-5 n°

⑩ Varin, *loc. cit.*: Item consensus concilium de negotio re-  
 mensis ecclesie, quod dominus rex debet credere domino  
 remensi super sententiis latis in civis remenses auctoritate  
 apostolica; nec de hiis pro quibus excommunicatos eos dicit,  
 rex aliquam debet facere inquisitionem. Item in hoc consen-  
 sit concilium, quod si dominus remensis requisierit regem,  
 ut ei prestet auxilium in emendandis excessibus civium re-  
 mensium pro quibus sunt excommunicati, prestare tenetur  
 eidem auxilium, nec super hoc aliquam debet facere inqui-  
 sicionem. Item in hoc consensus concilium, quod dominus  
 remensis non tenetur respondere super homicidio aut alio  
 crimine tangente personam ipsius, civibus remensibus in cu-  
 ria domini regis justiciariis et fidelibus suis, nec etiam super  
 alio, nisi fuerit in defectu; nec fuit in defectu, si non  
 collegit diem coram domino rege contra eos, maxime cum



ipsi essent excommunicati. Item in hoc consensit concilium, quod dicti episcopi personaliter accedant ad dominum regem, et nuncii capitulorum, ita quod presentes sint hac instanti die sabbati ubi dominus rex erit, ad supplicandum domino regi ex parte concilii humiliter super premissis et admonendum eum ex parte concilii super premissis, antequam recedant a curia domini regis.

Ⓢ Varin, *Arch. adm.*, I-2, pp. 585-589, n° CXLVI, 29 juillet-1235, Supplicatio facta domino regi per deputatos praecedentis concilii, ノコノコキモノノコキモノ Thomas de Bello Meseo ノコキモノノコキモノ Sainte-Marie de Soissons ノコキモノノコキモノ regalia ノコキモノノコキモノ

Ⓢ Varin, *Arch. adm.*, I-2, pp. 587-588, n° CXLVII, 5 août-1235, Concilium remense Compendii habitum :... consensit totum concilium, quod dominus rex movebitur secundo super ne-  
gocio remensis ecclesie et archiepiscopi, et bannicione Thome de Bello Manso, canonici remensis, per archiepiscoporum et suffraganeos suos prenomminatos, aut illos de predictis suffraganeis qui presentes fuerint; presentibus etiam dictis procuratoribus episcoporum, presentibus insuper et consensentibus nunciis capitulorum cathedralium remensis provincie.

Ⓢ *Ibidem.* Vide Varin, *Arch. adm.*, I-2, p. 588, n° CXLVIII, Mandatum concilii remensis Compendii habiti, ad abbates S. Crispini, S. Dionysii et de Essone, ut regem

Francie movent.

Ⓢ Varin, *Arch. adm.*, I-2, pp. 589, n° CXLIX, Septembre-1235, Prima monitio domino regi facta per abbates S. Crispini, S. Dionysii et Essonis, auctoritate concilii provincialis remensis, apud Compendium celebrati; n° CL, 8 septembre-1235, secunda monitio facta domino regi.

Ⓢ Varin, *Arch. adm.*, I-2, pp. 589-590, n° CLI, 15 septembre-1235, Epistola Gregorii pape IX ad suffraganeos remensis ecclesie qua eos hortatur ut remensem archiepiscopum contra scabios et cives remenses assistant; Porthast, *Regesta*, I, n° 10016, "Non sine cordis": Non sine cordis amaritudine nobis frater noster archiepiscopus remensis nuntiavit, nec nos absque compassione paterna nuper intelleximus nuntiatum, quod cum iam archiepiscopus sit dominus temporalis civitatis remensis, et scabini ac cives ipsius ejusdem archiepiscopi fideles, et filii esse debeant speciales, ipsi degenerantes ex filiis in privignos, rejecta disciplina justitie, ac religione fidei relegata, velut hostes iniqui non erubuerunt insurgere in parentes, in patrem exilium, et in matrem excidium, ac in se ipsos periculum, nequiter operati; conculcando dampnabiliter remensem ecclesiam matrem suam, et ejecto patre, ipsius hereditatem sibi volunt, propria usurpando; in quo excedunt tyrampnidem viperaum que aliter tantum dicuntur pernitiem operari, in alterum nichil penitus

machinantes : ipsi enim eandem matrem suam, in qua regenerationis lavacro sunt renati, pene importabiliter affligentes, eam nituntur modis omnibus concutere, et prefatum archiepiscopum patrem suum presumptione dampnabili hostiliter adeo prosequuntur, quod nulla videatur in eis devotionis seu gratitudinis scintilla penitus remansisse; in quibus omnibus quorundam aliorum dicitur esse manus. Quare archiepiscopus attendens quod hujusmodi excessus tam notabiles et enormes, adeo erant notorii, quod nulla poterant tergiveratione celari, tam in cives eosdem, quam sibi participantes, ex hoc excommunicationis sententiam promulgavit; sed ipsi malleum velut stipulam reputantes, nec ad percutientem se curant cum humilitate redire, nec ad percutientem se curant cum humilitate redire, nec agunt penitentiam de commissis; quin potius majoris exinde audaciam presumptionis assumpunt, ut ipsi ceteras civitates Francie exempli sui pernicie corrumpentes, soli provocent universos, contra gallicane, immo universalis ecclesie libertatem; nam etsi grave sit factinus quod committunt, gravius tamen committentium est exemplum. . . .

⑧ Varin, *Arch. adm.*, I-2, pp. 591-592, n° CLII, Septembre 1235, Conquestio baronum et militum regni Francie contra prelatos, ad Gregorium papam IX directa. 1) ㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

H. dux Burgundie, P. comes Britannie, H. comes Marchie,

「コトマツク古異様式カナドラルの成立ニ関スル書翰(終)」

A. comes Montifortis, Francie constabularius, comes vindocinensis, S. comes Pontivi, J. comes carnotensis, L. comes Sacrescensis; . . . comes Jouvigniaci, H. comes S. Pauli, . . . comes Rouciasi, H. comes Guinari, J. comes matsconensis, Robertus de Curtineo, Francie buticallarius, Galterius de Avesnes, Johannes de Nigella, Stephanus de Sacrocesare, vicecomes Castriduni, vicecomes Bellimontis, vicecomes Cas-trieraudi, Archambaldus de Borbonio, vicecomes Turenne, constabularius Normannie, Buchardus de Montemorenciaco, Henricus de Soliaco, Guillelmus de Meloto, Droco de Meloto, Gaucherus de Jovigniaco, Richardus de Harcourt, Johannes de Touciaco, Adam de Bellomonte, Johannes de Bellomonte, Johannes marescallus Francie, Hugo de Atheis, magister panerarie Francie, Gautfredus de Capella, Hugo de Bauceio, Gaufridus de Poemiacio, Robertus de Pissiac, Gaco de Pissiac, Guido Malvicini, Guido de Caproisa, et alii barones et milites qui domini regis Francie interfuerunt. Champagne ㊾ ㊿ ㊽ ㊼ ㊻ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㊽ ㊼ ㊻ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑨ Varin, *loc. cit.*, . . . Cum enim renensis archiepiscopus, et belvacensis episcopus homines ejus sint ligii et fideles, et ab ipso per homagium teneant sua temporalia in paritate et baronia, in hanc contra ipsum insurrexerunt audaciam, quod in sua curia jam nolunt de temporalibus respondere, nec in





suae, et pro emendis injuriarum omnium archiepiscopo occasione defensionis illatarum, et emendis, forisfactis, omnibus occasione discordiae oris, solvent ipsi archiepiscopo decem millia librarum parisiensiun; quator millia in proximis mundinis S. Aigulfi de Pruvino, apud Pruvinum, per unum diem antequam clametur: Hora! Hora! et reliquum totum, a festo S. Remigii: proxime venturo, usque ad tres annos subsequentes, quo libet anno duo millia librarum in praedicto festo sancti Remigii apud Remos; ita quod pagamentum de tota pecunia ipsi archiepiscopo, vel ejus successoribus, si ipse de eadem pecunia non dispuerit, infra dictum terminum integre sit completum.

聖人の Pactum なる「十ノ金ニヨリ」Saint-Denis 修道院の成立とその意義著者が紹介した。

(Omnibus praesentes literas inspecturis, Odo, Dei gratia beati Dionysii abbas, Petrus de Collemelo, S. Audomari praepositus, salutem in Domino. Noverit universitas vestra, quod cum nos de mandato domini regis; Remis venerimus pro emendis archiepiscopo faciendis, per consilium nostrum, super injuriis, excommunicationibus et forisfactis omnibus, quae inter cives remenses et archiepiscopum acciderant a tempore dissensionis inter ipsos motae, et pro demissis apertis et occultis, cum probata essent, ...)

⑨ Varin, *Arch. adm.*, I-2, pp. 608-610, n° CLXI, Janvier

1236, Sentencia a Ludovico IX Francorum rege lata, de fortericia facta Remis a burgensibus, de placitis in Porta Martis, de redditibus super vilam non vendendis, de tallis imponendis, de sigillo scabinatus, et quibusdam aliis.

⑩ 補註⑨。

⑪ Pacaut, *op. cit.*, p. 149, et *passim*.

⑫ Sens の祭師館『祭師館の歴史』一六三三年四月十九日付の『構造』の他の問題と共に『拙稿』初期トリエティック教会堂の成立』p. 27, et *passim*. 参照。

⑬ Pacaut, *op. cit.*, p. 140, et n. 10. Gauzlin が撰著であるとされる Suger の撰じた Chartres の capitulum の書牘(前註⑧)は、彼の人格を絶賛しながら、前回教との血縁関係には否定的な見方を示している。一般に高位聖職者の出自をかたりながらの風潮が、当時の教会内にもあったことはなごうか。Geoffroy は教皇使節に会った後、Louis VII の Aquitaine 旅上と同時に(Luchaire, *Louis VII*, p. 97, n° 1, 1137, 1-8 août, Bordeaux.) 又 Saint-Denis の聖徳代(一一四四年六月十一日)に『聖徳代』(Suger, *Libellus de consecratione ecclesiae Sancti Dionysii*, c. IV, Panofsky, *Abbot Suger, on the Abbey Church of St-Denis and its Art Treasures*, Princeton, 1946, p. 112.) ° Gauzlin (Joscelin) の『聖徳代』Louis VII 時代の聖徳代を論じた(Luchaire, *Louis VII*, p. 146, n° 147, a° 1145.) °

⑭ その死にまつては『聖徳代』を著して droit de dépuilles を放棄した(Luchaire, *loc. cit.* pp. 356-357, n° 356, a°

1155.)°

⑤ *Sinson, op. cit.*, p. 175. Renaud de Mouçon の臣僚に  
關する Guillaume des Barres (Bar-le-Duc) が 'fief' の  
Champagne なる領土に領有したことを Philippe  
親王 Thibaud III が 1198 年に Philippe Auguste に hom-  
mage lige を納めたこと、又 1101 年にその未亡人  
Blanche が 臣王の femme lige となつたこと、王國の統一に  
對して (*Reveil des actes de Philippe Auguste*, I, p. 130,  
n° 581, p. 237, n° 678.)° 聖 1105 年の王の文書に 'et  
fidelis nostris Willelmi de Barri' の語がある (*Ibidem*,  
p. 485, n° 892.)

⑥ *Comitis Theobaldi ad Saugerium et Radulfum comitem* (Ep.  
XXXVIII); Migne, P. L., t. CLXXXVI, col. 1365: ...  
Unde vobis notum fieri volo quod regale Carnotensis epis-  
copatus de rege in feodum teneo cum alio feodo meo, ita  
quod decedente episcopo regale episcopatus meum proprium  
est, quousque alius substituatur. ...

⑦ 聖 Luchaire, *Hist. des insti.*, II, p. 65; Gaudemet, *La  
collation*, p. 18. 本誌の 1159 年 11 月 29 日の文面  
明の Geoffroy 死亡の條に於て

⑧ Varin, *Arch. adm.*, I-2, pp. 508-509, n° LXXXVI, 24  
décembre 1218, Notitia de obitu D. Alberici remensis ar-  
chiepiscopi. 聖 Guillaume de Champagne の Notitia de obitu  
14 'Illustrissimi regis Francorum Philippi avunculus' と稱

コトヤツカ古典様式カナドラルの成立とその背景 (終)

1449 (*Ibidem*, p. 449, n° XV.)°

⑨ Varin, *Arch. adm.*, I-2, p. 463, n° XXXI, 1<sup>er</sup> octobre  
1207, Epistola Innocentii papae III ad niverensem et auro-  
lianensem episcopos, et abbatem Casae Dei, qua eis mandat  
ut inquirant an Albericus, in remensem archiepiscopum elec-  
tus, sit irregularis, indiscretus et manumissus; quod si id  
sufficienter probatum fuerit, eum a regimine remensis eccle-  
siae amoveant (Pothast, *Regesta*, I, n° 3191, "Illa venerabiles  
fratres")

⑩ 聖 聖 聖

⑪ Varin, *Arch. adm.*, I-2, pp. 480-485, n° LIV, Novem-  
bre 1211, Philippus... dilectis suis scabinis et civibus re-  
mensibus salutem. Mandamus vobis, et precise volumus,  
quatinus claves portarum civitatis remensis, quam a nobis  
tenet dilectus et fidelis noster Albericus, remensis archiepis-  
copus, eidem sine contradictione qualibet et dilatione redda-  
tis. Bannos etiam suos, sicut temporibus antecessorum suo-  
rum observati sunt, teneatis et observetis; ...

この王の処置は、1210 年 5 月カナドラルの火災の一年後  
にカナドラルの定礎が行なわれた更に半年後のことに属す  
る。従つて火災後 Reims 市政そのものが混乱状態にあつたべ  
しむべきことを計算に於いても、大司教と commune の間が円滑  
であつたため、カナドラルの工事自体に有利な状態にあつたべ  
しむべきである。1235 年以後の係争關係に際しての両者

と、更に王の立場を考へて、この処置は王のなみなならぬ大司教個人——更におそろへはカテドラル建設——への関心を示すのであらう。

- ⑤ Varin, *Arch. adm.*, I-2, p. 494, n° LXI, Septembre 1214, Carta quod A. remensis ecclesie archiepiscopus, Theobaldum comitem Campanie recepit in hominem de feodo quod tenet de se.

⑥ Petit-Dutaillis, *Louis VIII*, p. 325 et *passim*.

⑦ *Recueil des actes de Philippe Auguste*, II, p. 236, n° 678.

⑧ J. Longnon, *La Champagne*, dans Lot-Fawtier, *Hist. des inst.*, t. I, p. 130.

⑨ Varin, *Arch. adm.*, I-2, p. 541, n° CIX, 4 février, 1226, Hominium Blanche comitisse Campanie ac Theobaldi filii eius, pro feodis ab archiepiscopatu remensi dependentibus : ... reverendo patri carissimo domino et consanguineo nostro Henrico, remensi archiepiscopo, ...

⑩ Fouilloy ㊦ Amiens の西北西約四十四軒。

⑪ Pacaut, *op. cit.*, p. 143, et n. 1.

結

⑫ これは Soissons が suffragant として筆頭であつた為であ

る。Louis IX の戴冠は、Reims の大司教が空位であつたので Soissons の司教が上つた (Schramm, a. O., II, S. 80, Ann. 2.)。H.J. の著書に引く G. Bourgin, *La commune de Soissons et le groupe communal soissonnais*, Paris, 1908, p. 20, et *passim*, を見よ。マントレル着十年代を明らかにし得たので、特定の司教を考祭の対象となし得たが、その名を Névelon de Chérisy (1176-1207) であつたことが、onomastique の Pierrefont-Montmorency 家の出来によるに能性があつて、地縁關係も不自然ではない。十三世紀初頭のこの家の王に対する忠誠は今から言へばなさう。それによつて Névelon ㊦ 前田正教 (Hugues de Champfleury, 1159-1175) のトト archidiaconus であつた (Pacaut, *op. cit.*, pp. 108-109.)。後者 ㊦ Louis VII の chancelier であつた (1150-1172)。<sup>1)</sup> 又その 田田 Champfleury ㊦ Provins ㊦ 居へ (Pacaut, *loc. cit.*, p. 139)。<sup>2)</sup> 従つて Champagne 内にはあつた。Névelon がこの人物の影響を受けたとすれば、彼も亦王に忠誠であると同時に Champagne にも親近感を抱つた人になる。

古典様式ゴシックのカテドラルの特徴をもし仮に——矩形オジューヴを別にして——三層構造と放射状祭室の存在に求めるとすれば、それらは我々を、Sens をつて、Bourgogne の Cluny 派修道院教会堂群に導くであらうことはすでに述べた(第一章)。又古典様式ゴシックのカテドラルを成立せしめた大司教・司教座が、何れも多少ともに Champagne に關係

があるとするば(第五章)、それは Chamagne が正に王と Bourgoigne との間に立はだかつていた事を示すであろう。従つて我々は、最後に Cluny 自体、及び、その様式でカタドラルを建設した Autun (1120頃)、及び Cluny の娘として同様の様式で附属教会堂を建設した La Charité-sur-Loire (1125頃)をとりあげ、<sup>(1)</sup> それらの修道院や司教座と王との関係を再確認せねばならぬ。

Louis VIが一一一九年に「王国ノ最モ高貴ナ肢体デアル Cluny 修道院ヲ、王国内ニアル、ソノスベテノ priorati ヲ possessiones 及ビ附随スルモノトモニ、朕トフランス王(トシテ)ノ朕ノ後継者ノ defensio, garda, et tutela ニ受メテタ。」<sup>(2)</sup>この些か時期尚早な文書は、その故に真偽に關して論争を生んだが、<sup>(3)</sup> 實際に保護を受けるべく指定されたのは Paris の Saint-Martin-des-Champs 以テ、約四十の priorati であつ、<sup>(4)</sup> その大部分は Loire 河以北、當時の domaine royal 附近にある。

Autun が古くから「王の司教座」であることには問題がない。しかし地理的にみて、王と實際上如何なる關係にあつたかを決定することは困難である。しかし一一四七年、Louis VIIによる司教 Henriの確認は、その前年一一四六年にこのカタドラルのナルテックスが完成してゐる事と考えあわせると興味がある。一一八九年に Philippe Auguste は實質上その regalia を放棄した。<sup>(5)</sup> 他の南方諸司教区に對すると同様、むしろ名を捨てて実をとつたものと云えよう。<sup>(6)</sup>

La Charité-sur-Loire にては、Suger が教皇 Pascalis II と共に、一一〇七年三月九日その献堂式に列してゐる。<sup>(7)</sup> 従つてこの様式は、早くから Suger の知る所ではあつた。しかし王との法的な關係は、一一八二年に王がこの町と修道院に liberae consuetudines を確認し、且王の protectio と custodia との下に置いた時に始まるのではないだろうか。一般に Bourgoigne 方面へ王の勢力が伸びて行くのが一一六〇年代であるとしても、それが特に諸修道院について確實に法的な諸關係となるのは、一一八〇年代をまたねばならぬことを、上記の諸例は教えている。しかしてこの推論は、三



層構造、放射状祭壇に三つの特徴の伝播を導く場合、Boulogne の境を接して来た Sens を別とすれば、一応時間的に適合するものと思われる。王と Boulogne をクリエロー派との関係として、後日別稿でゆかりたす。

註

- (1) これらのカテドラル及び修道院附教会堂については、拙稿第二章註③及び K. J. Conant, *Carolingian and Romanesque Architecture*, 800 to 1200, Baltimore etc., 1959, pp. 115-118. 参照せよ。
- ② *Recueil des chartes de l'abbaye de Cluny*, éd. Brnel, t. V, pp. 295-298, n° 3943, a° 1119: ... monasterium Cluniacense, nobilibus membrum nostri regni, cum omnibus prioratibus, possessionibus et pertinentiis suis in regno nostro constitatis, in nostra et successorum nostrorum regnum Francie defensione, guarda et tutela recipimus. ...
- ③ Brnel, *op. cit.*, p. 295, n. 5; Newman, *op. cit.*, p. 74, n. 1. 参照せよ。既述の authenticity 問題を述べた。
- ④ *Chartes de Cluny*, loc. cit., p. 297. 繁々述べた Luchaire, *Louis VI le Gros, annales de sa vie et de son règne*, Paris, 1890, p. 130, n° 276. ⑤ 半紙にありては、E. H. Thompson, *Saint-Martin-des-Champs, Lihons, Mondidier, Abbeville, Crépi (en Valois), Nanteuil (de Haudouin), Auteuil, Grandchamp, Elincourt-Sainte-Marguerite, Coinci, Gaye, Vendevre, Tours-sur-Marne, Saint-Thibaud (de Viri-le-Braité), Fleury (sur-Ouche), Vergi, Trouhant, Mesvry,*
- Longpont, Nogent-le-Rotrou, Gassicourt, Pithiviers, Saint-Sauveur de Nevers, le Pont-aux-Moines, le Pré, près Donzi, Saint-Etienne de Nevers, Saint-Lambert de Nantes, Saint-Révérien, Lurci, Bourbon, Parai, Ambierte, Charlieu, Maregni, Rumiili, le West, Bougesant, Dompierre, Souvigni, Ris (en Auvergne), Sauxillanges, La Voûte, Saint-Flour, Saint-Savournin-du-Port.
- ⑤ Luchaire, *Hist. des insti.*, t. II, p. 79, n. 3; Newman, *op. cit.*, p. 224, n° 20.
- ⑥ *Recueil des actes de Philippe Auguste*, I, p. 308, n° 254, 1189 de 9 avril au 31 octobre. 王は本文に、今後世に於て Lyon の Autun 地方に regalia を贈り、その後、Etienne, évêque d'Autun の長子に、その regalia を Jean, archevêque de Lyon に譲渡した。
- ⑦ Imbart de la Tour, *op. cit.*, p. 454 sq. 以下は、Autun の regalia を、duc de Bourgogne に贈ったのである。
- ⑧ Suger, *Vita Ludovici regis Grossi*, c. IX, Migne, *P. L.*, t. CLXXXVI, col. 1268; ... Venit itaque Cluniacum, a Clunisco ad Charitatem, ubi celeberrimo archiepiscoporum, et episcoporum, et monastici ordinis conventu eidem nobili monasterio sacram dedicationis imposuit. ... Qui consecra-

tioni et nos ipsi interfuimus,...

⑥ *Recueil des actes de Philippe Auguste*, I, pp. 98-99, n° 75, 1182, du 1<sup>er</sup> novembre, au 16 avril 1183, Paris : ...  
Noverint... quoniam nos monachis et burgensibus de Chari-

tate concessimus omnes liberas consuetudines quas tenuerunt tempore patris nostri, et concessimus ut monachi et burgenses et omnia sua in omni loco, in nostra sint protectione et custodia, salvo alieno jure. Actum :....

## LES CATHÉDRALES GOTHIQUES CLASSIQUES AU XIII<sup>e</sup> ET LEUR FOND SOCIAL

—Les cathédrales de Chartres, de Reims  
et d'Amiens—

(Quatrième partie — Fin)

Hiroshi MORI

Tous les évêchés dans lesquels on a construit les cathédrales de style gothique classique avaient, sous le règne de Louis VII au plus tard, été comptés parmi les «évêchés royaux». Leurs titulaires, lorsque le roi leur remettait la *regalia*, temporels de l'église retenus *in manu regis* pendant la vacance du siège, devaient lui prêter la *fidelitas*. Comme il était interdit au clergé, théoriquement et canoniquement, de prêter hommage aux mains laïques, on a très souvent présumé au serment de fidélité des ecclésiastiques les effets juridiques de l'hommage.

Le chapitre de Reims devait au roi le service de l'ost : cela n'en était pas auparavant la coutume, mais au début du XIII<sup>e</sup> siècle, cela devint subitement son devoir comme à «tous les chapitres français». Ce n'était pas, à notre avis, à cause de la mense capitulaire, mais à cause de la *regalia* que l'archevêque recevait par fidélité : le service dû à l'archevêque comme vassal du roi avait été imputé au chapitre.

Les archevêques de Reims devaient aux rois le droit de gîte, que les rois leur exigeaient à l'occasion du couronnement pour séjourner dans la ville de Reims. Les évêques de Chartres et de Soissons devaient aussi ce droit une fois par an, tandis qu'à l'évêque d'Amiens, Philippe Auguste abandonna le droit de gîte pour le dédommager de l'hommage qui lui était dû en raison du comté d'Amiens, hommage que le roi ne pouvait rendre. Ainsi les évêques royaux ont, en prin-

cipe, été assujettis aux devoirs féodaux de l'*auxilium*.

Quant au *consilium*, nous croyons qu'alors, le roi et les barons français ont considéré les titulaires des évêchés royaux assujettis à la justice féodale : les évêques royaux devaient donc toujours répondre à la semonce de la cour royale, car ils étaient hommes liges qui tenaient leur *temporalia* en prêtant au roi l'hommage lige. L'Eglise s'y opposait en insistant sur liberté de l'église gallicane et universelle : nous pensons que, cependant, un certain nombre des archevêques et évêques se soient en réalité considéré liés très étroitement aux Capétiens par le lien vassalique.

Parmi les archevêques de Reims, les évêques de Chartres, de Soissons et aussi d'Amiens, qui étaient en principe assez fidèles aux Capétiens, nous trouvons des personnages issus soit de la famille comtale champenoise, soit de familles qui étaient proches à celle-ci. Les archevêques et les évêques qui avaient le désir et l'intention de réaliser leurs cathédrales dans le style gothique classique étaient donc fidèles et intimes avec les Capétiens en même temps qu'avec les comtes champenois. La Champagne se trouvant juste au milieu de la Bourgogne et du domaine capétien, il a fallu sans doute l'intermédiaire champenois pour introduire dans le style gothique les éléments bourguignons et clunisiens, l'élévation aux trois étages et le chevet aux chapelles rayonnantes, éléments essentiels du style gothique classique.